

センター模擬試験

第1回

国語

解説と解答

【解説】

第1問 現代文

【出典】

白川昌生『西洋美術史を解体する』（水声社、二〇一一年）の一節。なお、途中に一部省略した箇所がある。

白川昌生（しらかわ・よしお）は、一九四八年北九州市に生まれる。国立デュッセルドルフ美術大学卒業（マイスター）。美術作家。主な著書に、『美術・市場・地域通貨をめぐる』、『美術・マイノリティ・実践』、『美術・記憶・生』、『美術館・動物園・精神科施設』などがある。

【本文解説】

モネやマネと聞いて、すぐにその絵をイメージできたという人もいるだろう。だが、どこかで聞いたことはあるけれどどんな絵だったろう、と思った人も少なくないだろう。芸術論は苦手だという声をときどき耳にする。たしかに、美術館に頻繁に足を運ぶなどという人、芸術を身近なものと感じる人は必ずしも多くはないだろう。身近ではないものを論じた文章は、なんとなく敬遠したくなるものである。しかし、芸術論といえども、現代文の問題として出題される以上、芸術についての特別な知識が要求されているわけではない。妙な苦手意識など持たずに、本文に展開されている論理をしっかりと捉えるようにしたい。

では、本文を便宜上四つの部分に分けて、その内容を確認していこう（なお、本文の最初にあるフィリップ・フックの引用文は、第1段落に含まれるものとする）。

① 中東の首長が示した印象派への拒絶反応（第1段落～第2段落）

ここでは、オークション会社サザビーズの印象派・近代美術部門のディレクターを務めていたフィリップ・フックが、中東のとある国の首長にモネの絵を売ろうとした体験が紹介されている。

モネの絵には七〇〇万ドル、もしくはそれ以上の価値があるというフックの説明に対して、中東の首長はそれを信じることができない。彼は、自分の部屋の壁にかけてある伝統的なアカデミズム絵画の画家ジェロームの絵に歩みより、その絵に「私はたった九〇万ドルしか払っていない」と言った。そして彼は、人物たちがどれも写真のように細密に描かれていて、画面全体が完璧に仕上げられていたジェロームの絵を傑作だと述べ、モネについては「絵の描き方というものを知らないのではないか」などと酷評した。モネよりもジ

ェロームの絵のほうが優れているというこの中東の首長の判断は、一八七〇年代の印象派の登場に際して、当時の人々が示した反応、拒絶、軽蔑と同じものだった。西洋でも、登場した当初、印象派は伝統的なアカデミズム派よりも劣つたものと見なされていたのである。ところが、いつのまにか評価は逆転し、今日では印象派がアカデミズム派よりも高く評価されるようになった。そこには、「視覚の革命」があったという。

② 「視覚の革命」（第3段落～第4段落）

ここでは、マネおよびそれにつづく印象派の画家が起こした「視覚の革命」について説明されている。

A 伝統的なアカデミズム派

まず、伝統的なアカデミズム派の絵がどのようなものであったのか確認しておこう。アカデミズム派は、「細部にわたってあたかも写真のように描き、「色の調和と画面の仕上がりにも完璧さを要求する」ものであり、その絵は「スナップ写真のように、客観的に描かれる」ものであった。（第3段落）

そして、カイロの市場を描いたジェロームの絵のように、アカデミズム派の絵は、現実の風景、物語、歴史などの存在を前提として描かれたものであるという。（第4段落）

以上のようなアカデミズム派の絵の特徴を整理すると、次のようになる。

- ・細部にわたって写真のように客観的に描かれたもの
- ・現実の風景、物語、歴史などの存在を前提として描かれたもの

B マネ

アカデミズム派に対して、マネは「対象を見ている主体のリアルな感覚、知覚、記憶を生き生きと表現するため」の画法を発見した。それによつて私たちの目は「視覚が体験した感覚」を「画面の中で連続的に追体験できるようになった」のである。（第3段落）

マネの絵においては、現実の対象は絵画を成立させるための手段でしかない。マネの絵には、アカデミズム派が前提とした現実の風景や物語などの存在を必要としない、「絵画そのものである世界の発見」がある。そこでは、「見ていることのリアルさ、生き生きとした感覚」が意識されている。つまり、マネは、現実の風景を客観的に描くのではなく、対象を見ている主体のリアルな感覚を生き生きと表現しようとしたのである。したがって、私たちは、マネの絵を通して、風景を見るのではなく、「風景を見えるようにしている色彩、反射光、記憶として残っているリアルな感覚の連

動を見ている」のである。(第4段落)

以上のようなマネの絵の特徴を整理すると、次のようになる。

- ・対象を見ている主体のリアルな感覚を生き生きと表現したもの
- ・私たちが、そうした主体のリアルな感覚を画面の中で追体験できるもの

C 「視覚の革命」

では、そうしたマネの絵がもたらした「視覚の革命」とは何か。アカデミズム派は、「目に見えるとおりに描く」ことを標榜し、現実の風景などを写真のように細部にわたって客観的に描いてきた。それに対して、マネは対象を見ている主体のリアルな感覚を生き生きと表現しようとしたが、こうしたマネの描き方も、「目に見えるとおりに描く」ことの一つのあり方と言えるのではないか。マネは自らの「目に見えるとおりに描く」ことを実行することで、アカデミズム派の「目に見えるとおりに描く」ことが唯一絶対のものではなく、ある文化的約束を前提にした一つの「目に見えるとおりに描く」ことにすぎないことをあばいたのであった。つまり、マネの登場によって、「見ること、描くこと」自体が「文化的制度」であることがはじめて明らかになったのであり、これ以後、「見ること、描くこと」は、そうした自覚なしにはすまされなくなった。これが「視覚の革命」である。(第4段落)

では、「見ること、描くこと」が「制度」であるとはどういうことだろうか？ この問題について説明しているのが、次の③の部分である。

③ 「目に見えるとおりに描く」ことのさまざまなあり方(第5段落～第6段落)

ここでは、「目に見えるとおりに描く」ことにはさまざまなあり方があること、そうしたなかで、近代意識を反映した印象派独自の「目に見えるとおりに描く」ことが世界中で受け入れられていったことが説明されている。

美術は、原始の時代から「目に見えるとおりに描く」ことを追求してきた。にもかかわらず、美術史を振り返ると、そこには時代ごとにさまざまな様式があったということがわかる。そして、それらの様式はいずれも、「目に見えるとおりに描く」ものだったのである。たとえばある時代の画家たちは、「目に見えるとおりに描く」ために「幾何学紋様」を用い、別の時代の画家たちは、やはり「目に見えるとおりに描く」ために「リアリズム画法」という技術を用いた。アングルという画家がとった技法も、人間の姿を「目に見

えるとおりに」美しく描くために用いた「強調や変形の手法」だと考えてよいだろう。(第5段落)

これは要するに、時代や文化ごとに、さまざまな「目に見えるとおりに描く」描き方があつたということである。そして、たとえば「幾何学紋様」を用いて「目に見えるとおりに描く」ことが流行すれば、同時代の同じ文化のなかでは、そのような絵ばかりが描かれることになる。これが、「見ること、描くこと」が「文化的制度」である(傍線部B直前)ということなのである。ここでの「制度」という言葉は、「約束事」といった意味にとればよいだろう。

そして十九世紀後半というのは、この「制度」が大きな転換をとりようとしていた時代だった。それ以前の時代の画壇の主流を占めていたのは、「保守的なアカデミズム派」だった。この一派の特徴は先に②のAで確認したとおりだが、十九世紀後半以前の人々は、そうした「アカデミズム派」の描き方こそが「目に見えるとおりに描く」描き方だと信じ、自分たちもそのようにものを見ていたのである。しかし十九世紀後半になると「印象派」が台頭をはじめ、先の②のBのような描き方こそが「目に見えるとおりに描く」描き方だと主張しはじめたのだ。

制度が新しくなったとき、その制度にすんなりとなじむ者もいれば、それになじめず古い制度に固執する者もある。「保守」派の画家であるジェロームは、もちろんなじめない者であった。彼は、「国家」が「印象派コレクション」を受け入れることに猛反対する。もしも政府が印象派を受け入れてしまったら、それは印象派が新しい「制度」として公認のお墨付きをもらったということになってしまうからだ。

しかしジェロームの反対にもかかわらず、国家は印象派の方を支持した。印象派の描き方こそが「目に見えるとおりに描く」描き方だという約束事＝「制度」が、暗黙のうちに成立したのである。こうして保守的な「アカデミズム派」は歴史の舞台から消え去り、代わって印象派が、世界中で価値あるものとされることになった。もちろん、印象派の絵には高い値段がつくようになる。(以上、第6段落)

そしてここまで読めば、冒頭であげられていたエピソードもこうした状況を踏まえたものだとわかるだろう。印象派マネの作品が高い値段で取り引きされるというのは二十世紀における約束事なのであり、中東の酋長がマネの絵の値段に納得できずにいるのは、彼がそうした約束事を身につける(＝最終段落の表現でいえば「身体化」する)ことができていなかったからなのである。

④ 世界に浸透する近代的な価値と印象派 (第7段落
↳最終段落)

最後に、近代的な価値が世界に広がっていく中で印象派の絵も世界に受け入れられていったこと、そしてモネの絵に不信感を抱いていた中東の首長も、結局はその絵を購入するであろうことが説明されている。

③で見たように、印象派は新しい「制度」として認められるようになったが、それはなぜだろうか。それは、対象を見ている主体のリアルな感覚を生き生きと表現しようとする印象派の作品が、個人を尊重する近代意識を反映したものだからである。印象派独自の「目に見えるとおりに描く」という姿勢は、近代生活の感覚や価値観などに適合していたからこそ、近代の社会制度を取り入れようとする世界のあらゆる場所で受け入れられていった。印象派の絵は、世界中に拡散した近代生活の象徴として定着したのである。(第7段落)

①で見たように、フックがモネの絵を売ろうとした中東の首長は、その絵に拒絶反応を示していた。だが、大理石の宮殿に住むその首長は、エアコンやパソコン、贅沢な皮のソファなど近代社会が生み出したものに囲まれて暮らしている。そうした首長にとって、近代を象徴する印象派の絵画を購入することは、自分が近代人であることの立派な証明になる。財力と権力を持つ支配階層の人間は、いつの時代にも、古典的な美術品を好みと同時に、その時代を象徴する美術品も所有したがるものである。支配階層にとって、それは社会的ステータスのしるしとして必須のものなのである。つまり、モネの絵に拒否反応を示していた中東の首長は、自らの社会的ステータスを示すためにも、また自らが近代人であることを証明するためにも、その絵を購入することになるというのである。そして、いったん近代的感覚の絵を認めてしまった以上、この中東の首長は、近代世界の一員として、近代的な価値、感覚を身体化することになるのである。(最終段落)

□ まとめ

最後に、本文全体の論の流れをまとめておこう。

- ① 中東の首長が印象派の絵に拒否反応を示したという逸話が紹介されている。
- ② 伝統的なアカデミズム派と印象派の違いを踏まえつつ、印象派の起こした「視覚の革命」について説明されている。
- ③ 古来、画家は「目に見えるとおりに描く」ことを追求してきたが、それには時代や文化などによってさまざまなあり方があること、また伝統的なアカデミズム派と印象派の対立が近代美術の誕生

と価値観の転倒をもたらしたことが説明されている。

- ④ 近代的な価値が世界に広がっていく中で、近代意識を反映した印象派独自のものの見方、描き方が世界に浸透していったことが説明されている。

【設問解説】

問1 漢字の知識を問う問題

(ア)は、「傑作」。①は、「思いきつて立ち上がること」という意味で、「決起」。②は、「欠けたところのないこと」という意味で、「無欠」。③は、「武勇にすぐれ、強くて度胸のある人物」という意味で、「豪傑」。したがって、これが正解。④は、「転結」。⑤は、「心や行いが正しく、やましいところなどないこと」という意味で、「潔白」。

(イ)は、「極端」。①は、「味方になって、力をかすこと」という意味で、「荷(加)担」。②は、「心の中(もともとは肝臓と胆嚢)」という意味で、「肝胆」。「肝胆相照らす」で、「心の底まで打ち明けて親しくつきあう」という意味。③は、「事情を説明して熱心に願うこと」という意味で、「嘆願」。④は、「容姿が美しく整っていること」という意味で、「端整」。したがって、これが正解。⑤は、「神仏、聖人、偉人などが、この世に生まれること」という意味で、「降誕」。

(ウ)は、「芸術などの分野で、際だつてすぐれた実績を持つ人」という意味で、「巨匠」。①は、「作品を作るときに創意や工夫」という意味で、「意匠」。したがって、これが正解。②は、「呼び戻すこと」という意味で、「召還」。③は、「なげかわしい出来事、好ましくない事件」という意味で、「不祥事」。④は、「継承」。⑤は、「当事者でないものが口出しをし、他人を自分の意思に従わせようとすること」という意味で、「干渉」。

(エ)は、「自分の意見などを強く主張してゆずらないこと」という意味で、「強硬」。①は、「考え方・態度などが柔軟性を失うこと」という意味で、「硬直」。したがって、これが正解。②は、「徐行」。③は、「専攻」。④は、「巧妙」。⑤は、「手柄を立てて名をあげること」という意味で、「功名」。「けがの功名」で、「何気なくしたことや、過失だと思われたことが、偶然よい結果を招くこと」という意味。

(オ)は、「増殖」。①は、「法律や規則に反すること、ふれること」という意味で、「抵触」。②は、「誤植」。③は、「産業を盛んにすること」という意味で、「殖産」。したがって、これが正解。④は、「装飾」。⑤は、「特定の仕事を人に頼りまかせること」

という意味で、「委囑」。

問2 アカデミズム派の絵画の特徴を説明する問題

「すべてを確実に描いている」とされるジェロームの絵の特徴が問われている。伝統的なアカデミズム派の画家であるジェロームの絵については、まずフックの引用文のなかで「人物たちはどれも写真のように細密に描かれていて、画面全体が完璧に仕上げられていた」「リアルで、すべてが目に見えるとおりに描かれている」などと説明されている。また第3段落では、アカデミズム派の絵は、「細部にわたってあたかも写真のように描かれ、「スナップ写真のように、客観的に描かれる」ものだとされている。さらに第4段落では、ジェロームの絵は、現実の風景、物語、歴史などの存在を前提として描かれたものだとされている。以上のようなアカデミズム派の絵の特徴を整理すると、次のようになる。

- a 写真のように細部にわたって目に見えるとおりにリアルに描いている
- b 現実の風景、物語、歴史などの存在を前提として描いている

したがって、以上の点を踏まえた説明になっている④が正解。

①は、「あらゆる技法を排して」という説明が、不適當。写真のように細部まで描くというのも、一つの立派な「技法」である。

②は、「自分の視覚の客観性だけを信じて」という説明が、不適當。それでは、自分の視覚を客観的なものだと自分が信じさえすれば良いということになってしまいが、アカデミズム派にあつては、絵は現実の風景などを前提に、「写真のように、客観的に描かれる」ことが必要なのである(第3段落)。自分の視覚、つまり自分の感覚を信じるというのは、むしろ印象派の態度であろう。

③は、「視覚に関する近代美術の革命の成果を踏まえて」という説明が、不適當。「視覚の革命」を踏まえているのは印象派であり、傍線部は、それより古い時代に主流だったアカデミズム派の特徴である。

⑤は、「主体のリアルな感覚や記憶を意識し、鮮やかな色彩を効果的に用いて表現している」という説明が、不適當。第3段落の後半にあるように、そうしたことは、アカデミズム派ではなく、マネをはじめとする印象派の絵の特徴である。

問3 「視覚の革命」を説明する問題

「視覚の革命」については、第3段落と第4段落

で説明されている。伝統的なアカデミズム派の絵は「スナップ写真のように、客観的に描かれる」ものであつたのに対して、マネは「対象を見ている主体のリアルな感覚、知覚、記憶を生き生きと表現するため」の画法を発見した(b)。それによつて私たちの目は「視覚が体験した感覚」を「画面の中で連続的に追体験できるようになった」(c)のである。(以上、第3段落)

マネの絵にあつては、現実の対象は絵画を成立させるための手段にすぎず、そこでは「見ていることのリアルさ、生き生きとした感覚」が意識されており、私たちは、マネの絵を通して「風景を見えるようにしている色彩、反射光、記憶として残っているリアルな感覚の運動を見ている」のである。そして、印象派が「光を表す」ことを中心主題としたのは、アカデミズム派が本当は「目に見えるとおりに描く」のではなく、ある文化的約束を前提に描いていることをあはき、その前提を省いて「目に見えるとおりに描く」ことを実行しようとしたからに他ならない。つまり、印象派は独自の「目に見えるとおりに描く」ことを実行することで、アカデミズム派の「目に見えるとおりに描く」ことが唯一絶対のものでなく、ある文化的約束を前提にした一つの描き方にすぎない(a)ことをあばいたのである。それは、見ること、描くこと自体がある「文化的制度」に依存した行為であることが認識されることを意味する(d)のである。これが「視覚の革命」である。(以上、第4段落)

以上の点を整理すると次のようになる。

- a ある文化的約束を前提にした伝統的なアカデミズム派の絵とは異なり
- b 対象を見ている主体のリアルな感覚を生き生きと表現するための画法がマネや印象派によつて発見された
- c 私たちはその感覚を追体験できるようになった
- d それは、見ること、描くこと自体がある文化的制度に依存した行為であるという認識がもたらされたことを意味する

したがって、以上の点を踏まえた説明になっている①が正解。

②は、「目に見えるとおりに描こうとしているのは『光を表す』ことを中心主題とした印象派の方だ」という説明が、正確ではない。筆者の考え方によれば、アカデミズム派も印象派も、自分たちなりのやり方で「目に見えるとおりに描く」こうとしていたのである(第5段落)。

③は、「絵画は既存の約束事にとられない自由なものであるべきだ」という説明が、本文に書かれていないものなので、不適当。また、「現実の風景や物語的記述などを、絵画を成立させるための手段として利用した絵が描かれるようになった」というのも誤り。マネの絵は、「現実、物語、意味を必要としない」ものだったのである(第4段落)。

④は、「印象派の営為が、結局アカデミズム派が依拠していたのと同じ文化的約束に従わざるをえなかった」という説明が、不適当。傍線部の前にあるように、「アカデミズム派が……ある文化的約束を前提に描いている」のに対して、印象派は、「その前提を省いて、『目に見えるとおりに描く』ことをラディカルに実行しようとした」のである。そもそも印象派がアカデミズム派と「同じ文化的約束に従わざるをえなかった」というのでは、「視覚の革命」の説明にならないはずである。

⑤は、「目に見えるとおりに描くということが根本的に不可能であることを明らかにした」という説明が、本文にいつさい書かれていないものなので、不適当。

問4 二十世紀のアカデミズム派の置かれた位置を説明する問題

傍線部を含む段落では、十九世紀後半の保守的なアカデミズム派と革新的な印象派の対立が、その後どうなったのかが説明されている。この問題については、【本文解説】③で説明しておいたので、そこを参照してほしい。

一八七〇年代の印象派の登場に際して人々が拒絶反応を示した(第2段落)ことからわかるように、印象派が登場する以前は、人々はアカデミズム派の画家たちと同じように風景やものを見ていた(a)のである。ところが、十九世紀後半の両者の対立は、「近代美術(モダン・アート)の誕生と価値観の転倒を告げていた」のである。一八九〇年、自分の印象派コレクションを国家に遺贈するという遺言を残してカイユボットが死んだとき、アカデミズム派のシエロームはそれを政府が受け入れることに強硬に反対した。しかし、「フランス政府は、そして歴史は……印象派のほうを支持し、アカデミズム派は歴史の舞台からやがて消えていってしまう(d)」のである。そして、美術市場でも、印象派のほうがアカデミズム派よりも高い評価を受けるようになり、二十世紀には印象派の作品は世界中の美術館へ入っていく(b)。その一方で、アカデミズム派の作品は「歴史の舞台」から消え、過去の遺物となつ

た(d)。つまり、「歴史の一部となつてしまった」のである。

では、こうした変化はどうして起こつたのか。傍線部の次の段落にあるように、印象派の提示した、近代意識を反映した独自の「目に見えるとおりに描く」という姿勢は、近代生活の感覚や価値観などに適合したものだといふのである。つまり、近代生活の感覚や価値観に適合した(c)印象派のものの見方や描き方は、近代の社会制度を取り入れようとする世界のあらゆる場所で受け入れられていった(b)のである。

以上の点を整理すると次のようになる。

a かつてはアカデミズム派のものの見方や描き方が、人々に広く受け入れられていた



b 印象派が登場すると、そのものの見方や描き方は近代社会に広まった

c それは、印象派のものの見方が近代の生活感覚や価値観に適合していたからである



d 結果的に、アカデミズム派のものの見方や描き方は、歴史の舞台から消え、過去の遺物となつた

したがって、以上の点を踏まえた説明になつている④が正解。

①は、「アカデミズム派は人びとのものの見方、描き方を規定してきたが、それは、政府の支持があつてはじめて可能だつた」という説明が、不適当。そうしたことが「政府の支持があつてはじめて可能だつた」のかどうかは、本文から確定できない。カイユボットの印象派コレクションを「政府」が受け入れたという話題は、印象派が主流になつたということを示す具体的なエピソードにすぎず、政府の支持がなければ印象派が広まらなかったというわけではないだろう。

②は、「そうした(＝目に見えるとおりに描く)ことにこだわらない印象派」という説明が、不適当。傍線部cの後にあるように、印象派は、「近代意識を反映した独自の『目に見えるとおりに描く』という姿勢」をもっていたのである。

③は、まず「近代の資本主義社会では市場の原理が何よりも優先されるため、モラルの低下が避けられず」という説明が、本文に書かれていないので、不適当。また「墮落も怖れない印象派」という説明も、不適当。印象派は、アカデミズム派から「墮落した」ものという批判は受けてきたが、印象派自身が「墮落も怖れない」という考えをもっていたなど

とは本文に書かれていない。

⑥は、アカデミズム派が「過去の遺物と見なされるようになった」理由を、美術市場の評価の「ため」と限定して説明している点が、不適当。傍線部Cの前にあるように、「フランス政府は、そして歴史は……アカデミズム派ではなく……印象派のほうを支持し」たのであり、「美術市場におけるオークション価格も、印象派のほうがアカデミズム派より高い値がつく」ようになったのである。つまり、アカデミズム派が「過去の遺物と見なされるようになった」のは、政府や歴史の支持などのさまざまな要因があり、美術市場の評価はそうした要因の一つにすぎないのである。

問5 中東の酋長がモネの絵を購入する理由を説明する問題

傍線部の前にあるように、中東の酋長はモネに対して不信感を抱いていた。にもかかわらず、「彼がモネを購入することは間違いないだろう」と筆者がいう理由が問われている。

傍線部の直後にあるように、大理石の宮殿に住むその酋長は、エアコンやパソコン、贅沢な皮のソファなど近代社会が生み出したものに囲まれて暮らしており(a)、そうした酋長にとって、近代を象徴する印象派の絵画を購入すること自体が「近代人であることの立派な証明になる」から(b)である。そして、財力と権力を持つ支配階層の人間は、いつの時代にも「古典的な美術品を好むと同時に、その時代の象徴となっている美術品をも手元においておきたがるものである」。その時代の象徴となっている美術品を所有することは、社会的ステータスのしるしとして、支配階層に必須のものであるから(c)である。

以上の点を整理すると次のようになる。

- a 中東の酋長は、近代社会が生み出したものに囲まれて暮らしている
- b そうした彼にとって、近代を象徴する印象派の絵画を購入することは近代人であることの証明になる
- c そうした彼にとって、近代を象徴する印象派の絵画を所有することは社会的ステータスを示すことになる

したがって、以上の点を踏まえた説明になっている②が正解。

①は、「それ（＝美術市場で自分の所有する絵よりも高い評価を与えられている作品）を所有するこ

とが、自らの社会的地位を示すことにつながる」という説明が、不適当。こうした説明だと、とにかく高価な作品を所有すれば社会的地位を示すことができるということになってしまうが、本文では、最終段落にあるように、「その時代の象徴となっている美術品」を所有することが「社会的ステータスのしるし」だというのである。本文の論旨を踏まえて考えれば、モネの絵は「近代」の価値観を象徴するものだからこそ高価で取り引きされているということになる。したがって、「近代」の問題にふれていないこの選択肢は正解にならない。

③は、「過ぎ去った時代を象徴する古い美術作品を所有する……」という説明が、不適当。これでは、近代を象徴する印象派のモネの作品を購入する理由の説明にはならない。

④は、「それ（＝美術市場で高い評価を与えられた作品）を所有することで支配階層としての自己証明にしようとする」という説明が、不適当。この選択肢も、①と同様に、とにかく高価な作品を所有すれば社会的ステータスを示すことができるという説明になっている点が、誤り。また、この選択肢では、モネの作品が「美術市場で高い評価を与えられた作品」であるとされているだけで、それが「近代」を象徴するものだということが説明されていない。したがって、正解②に比べれば明らかに不十分な内容だといえるだろう。

⑤は、「古典的な美術作品ではなく、近代を象徴する作品を所有することに自己証明を見出す」という説明が、不適当。最終段落にあるように、支配階層の人間は、「いつの時代にも、古典的な美術品を好むと同時に、その時代の象徴となっている美術品をも手元においておきたがるもの」だというのである。

問6 本文の論の展開について説明する問題

こうした問題では、一つ一つの選択肢の説明を本文の記述と慎重に照らし合わせ、消去法を使って解答を確定していくこと。なお、【本文解説】の最後の「まとめ」も参照して欲しい。

①について。本文では、「十九世紀後半以来（現在に至るまで）のアカデミズム派と印象派の闘争の歴史」が「回顧」されているわけではない。また、「その（＝アカデミズム派と印象派の）闘いが現在もつづいている」という説明が、不適当。最終段落の冒頭にあるように、「アカデミズム派と印象派の闘いは、二十一世紀の現在から振り返ってみると……あらゆる面で、印象派の圧倒的な勝利だった」

のである。

②について。まず「モネの絵を酷評した中東の首長に、印象派の絵の価値を歴史的に説明する」という説明が、本文に全く根拠がない説明になっている点が、不適當。また、「その絵を購入させた」という断定も、傍線部Dの「彼がモネを購入することは間違いないだろう」と筆者が推測的に述べていることとズレてしまう。

③について。「西欧では印象派が当初から人びとに支持された」という説明が、不適當。傍線部Aの直後にあるように、「一八七〇年代の印象派の登場」に際して、当時の人々は「拒絶、軽蔑」といった反応を示したのである。

④について。「中東の首長が、モネを評価する資本主義的な価値観に違和感を覚えている」という説明が、不適當。中東の首長は、大理石の宮殿に住み、エアコンやパソコン、贅沢な皮のソファなど資本主義のもたらしたものに囲まれて暮らしているのだから、「資本主義的な価値観に違和感を覚えている」とは言えないはずである。

⑤について。【本文解説】の「まとめ」で示したように、まず①で、筆者は、印象派に拒絶反応を示した中東の首長に関する逸話を紹介していた。次の②では、印象派が起こした「視覚の革命」について説明していた。その後、③では、「目に見えるとおりに描く」ことにさまざまなあり方があることを考察し、最後の④で、近代意識を反映した印象派独自のものの見方、描き方は、近代的価値とともに世界に浸透してきたという結論を述べている。したがって、これが正解。

第2問 現代文

【出典】

織田作之助の小説「婚期はずれ」。ただし、本文には一部省略した箇所がある。本作は、雑誌「会館芸術」一九四〇年（昭和十五年）一月号に発表された。今回の本文は、『織田作之助作品集 第二巻』（二〇〇八年 沖積舎 大谷晃一編）によっている。

織田作之助（おだ・さくのすけ）は、昭和一〇年代に活躍した小説家で、「オダサク」の愛称で知られる。一九一三年（大正二年）、大阪市南区（現在の天王寺区）で、路地裏にある仕出屋の長男として生まれた。第三高等学校（新制京都大学教養部の前身）に進学するが、結核を患って卒業試験中に咯血し、白浜温泉への転地療養を余儀なくされる。その後、劇作家を経て小説家となり、「俗臭」「夫婦善哉」「薨馬」「世相」など、数多くの短編小説を発表。一九四七年（昭和二十年）、結核による大量咯血で他界した。

文学史上では、太宰治や坂口安吾らとともに、無頼派（新戯作派）の一人として数えられる。大部分の作品は大阪を舞台としており、登場人物のほとんどもそこで暮らす庶民である。

【本文解説】

物語の舞台となっているのは、戦前の大阪のある理髪店一家。そこで何年かの間に起きた出来事が、母親のおたかを中心として描かれている。おたかは息子二人と娘四人を抱える未亡人だが、子供たちのところにくる縁談を次々に断ってしまい、結局、息子たちも娘たちも独身のまま、物語は終わってしまう。

ことわるまでもないが、当時はまだ、良縁に恵まれ結婚することこそが人生の最大の幸福であるといった価値観がまかり通っていた時代であった。「二十六で未だ片附かぬのはおかしい」（8行目）といった言葉もそうした時代状況にもとづいて理解すべきだということは、いうまでもないだろう。

① 先代店主の死と、残されたおたかや子供たち（1～13行目）

物語は大正時代、朝日理髪店の主人が亡くなった際の葬礼での出来事から始まる。夫に先立たれたおたかが、供養のために、「友恵堂（＝おそらく近所では知られた菓子屋の名前という設定であろう）の最中が十個も」入った袋を五百も配ったのだ。近所の人々は「よくも張り込んだ（＝大金を投じた、奮発した）ものだ」と噂したが、菓子袋には朝日理髪店という店名がはつきり書かれていた。おたかが菓子を配った理由は、一つには店の「宣伝のため」（4行目）だったのである。

しかし、こうした供養が行われたのにはもつと大きな理由があった。おたかは、今後の一家のことを案じて、近隣の人々に気をつかったのである。

理髪店を継ぐのは長男の永助だが、彼はまだ三十二歳だった。おまけに「高慢たれで、腕はともかく客あしらいは存分にわるい」。散髪に来た客相手に理屈っぽい話をするといった青臭いところもあって、いかにも大人になりきれていない独身男といった雰囲気漂わせていた。

また、長女の義枝は二十六歳で独身だった。これは現在ではどうということもないことだが、当時の社会通念では、いわゆる「適齢期」を過ぎている。また当時は、結婚は兄弟のうちの年長者から順にすべきものといった考え方も根強かったため、この義枝が嫁に行かないと、二十三歳の次女、定枝もなかなか結婚できないということになる。

先代の主人が亡くなったいまとなつては、こうしたことが「おたかの責任」めいてくる(9行目)。しかも一家には、まだ下に十七歳と十歳の娘、そして十三歳の息子がいるのだ。だからおたかは、「病氣一つ出来ぬ後家(＝未亡人)」だった(12行目)。こうした理由でおたかは、これからも私たち一家のことをよろしくとばかりに、近所に気配りをしておかなければならなかつたのだ。これが、葬礼の供養にたくさんの専手を配つた理由なのである。

㊦ たびたびあった縁談と、それらをすべて断つてしまったおたか(14～57行目)

この部分では、父親の死と前後して、長男や娘たちにたびたび縁談がもちこまれたものの、おたかがそれらのすべてを断つてしまったという話が語られている。なお、ここでは、話が必ずしも出来事の起きた順に書かれているわけではないということに注意してほしい。

最初に書かれているのは、父親が死んで間もない頃にあった、長女の義枝への縁談についてである(16～20行目)。このときおたかは、「相手の身分も訊かぬうち」に「喧嘩腰」のようなかたちで話を断つてしまふのだが、そうしたおたかの「意固地」なあり方が、いまに始まつたことではないと書かれていることに注目しておこう。

さかのぼって父親の生きていたころ、やはり長女の義枝に三度の縁談があつた(21～27行目)。これらの話もすべて破談になつているのだが、話を断るとき、おたかは仲人に向かって「格式が違ふことあれしまへんか」と言っている。当時まだ生きていた先代の主人、つまりおたかの夫は、「理髪組合の総会へ洋服で

出席した最初の人」で、「町会の幹事」もしていた(25～26行目)。また、「理髪養成学校の創立委員」で、その教師も任されていたのだ(5～6行目)。おたかのなかにはそうしたことへのプライドのようなものがあり、そこから生じた虚栄心もあって、「格式が違ふことあれしまへんか」という言葉が口をついて出てきたのだろう。ただ、その一方で、話を断つた後のおたかは、「おなしい寂しさ」(24行目)や「責任」(26行目)を感じている。こうしたおたかのあり方も、しっかりと確認しておきたい。

28行目からは、再び先代の死後のことが語られる。先代が亡くなって二年後、永助が三十四歳のとき、彼のところに縁談が来た。しかし今度もおたかは、永助本人の気持ちも確かめぬまま、話を「有耶無耶」に「してしまふ」。

その後、今度は次女の定枝のところに縁談が舞いこんできた(32～44行目)。定枝は二十五歳とあるから、やはり先代の死から二年後である。このとき、おたかは一度は乗り気になり、「固い表情」を「崩」していた。仲人の話のもつて行き方が上手かつたということもあるが、なにより相手が小学校の教員という堅実な職業で、「ますます世間態」(＝世間体)は良い」とおたかは考えたのである。しかし今回も、おたかは話を断つてしまふ。ここで、「おたかには断るほどの理由もはつきりとはなく」とあるのに注意しよう。要するにおたかは、格別な理由もないまま、いつものように断つてしまつたのである。すると苦勞人の仲人は、「師はんをさし置いて妹御をかたづけける法もなかつた」と気づかいを見せてくれた。ところがこの仲人の言葉が、おたかの心には妙に強く響いてしまふ。長女がいまだ嫁に行つていないのは母親である自分の責任だとしても感じたのだろうか。結局おたかは居直つたような態度になり、例によつて「格式いうもんがおまつさかない」と決まり文句を吐くのだった。

次の縁談は、三女の久枝のところに来た(45～50行目)。このとき久枝は二十歳。相手は銀行員だつたため、世間体を気にするおたかにとっては「飛びつきたい話」だった。しかし今度は、相手が久枝と同じ銀行で働く男だということが、おたかには気になつてしまふ。当時、結婚とは正式な仲介人を立て見合いなどを経てすべきものだという考え方が根強く、若い男女が自分たちで恋愛をして結婚するということに対して偏見をもつ人も多かつた時代である。同じ職場の男と結婚したということになれば、「浮いた話」ではなかつたかと近所から噂されるかもしれない。ここでもおたかは、世間体を気にしたのだ。結局おたかは、「義枝(＝長女)の縁組みもせぬうちに久枝をかたづ

けるわけには行かぬ」と自分自身を納得させて、やはりこの縁談を断ってしまったのである。

そうこうするうちに先代の死から三年が経ったのだが、おたかの心は穏やかではなかった。末娘の持子を女学校に入れたことには多少の満足を感じたが、夏の晩に路地裏で娘たちが床几にずらりと腰掛けて夕涼みしているのを見たりすると、おたかは、娘たちを早く嫁に行かせなければと、焦る気持ちを募らせていったのである(51～57行目)。

③ 若い男の登場と、その男の夜逃げ(58～69行目)

朝日理髪店のある路地に、株屋の外交員をしている花井という若い男が、母親とともに越してきた。「長屋住いには惜しい男だ」と感じたおたかは、すぐに惣菜などを花井のところにもつていき、ご機嫌をうかがうようになる。惣菜が張り込んだものであることからわかるように、おたかは花井を娘の結婚相手にと考えているようだ。そんなことが半年も続き、近所のひとびとも「誰を貰ってもらうつもりやろ」と噂するようになった。

しかし当のおたかは、自分から娘の結婚のことをい出せない。ときには花井に対して「わざと冷たく構えて」しまい、「あとで後悔する」こともあった。こうしたおたかの態度は、人前で必要以上に「意固地」になってしまったり(20行目)、はつきりとした理由もなく縁談を断ってしまったり(40行目)といった、これまで彼女が見せてきた態度に通じるものである。おたかは、もともとどこか素直になれないような性分をもっており、それが折にふれ言動などに表れるような女性なのである。

花井は次第におたかに馴れ馴れしく接するようになるが、彼は突然、母親とともに夜逃げをしてしまう。他人の金を株で使い込んだためだと知ったおたかは、結果的に「うまく災難をのがれた」わけだが、心の動揺は隠しきれなかった。

④ 末娘の出産を機にめきめきと明るくなった、朝日理髪店一家(70行目以降)

冒頭の場面から八年が経ったが、朝日理髪店一家の子供たちは、まだ誰も結婚していない。ここには一五十七歳のおたかはどういうわけかめつきり肥えて、息苦しうに立ち働いた」という表現があるが、これはおたかのバイタリテイあふれる姿といったものを示したのだと考えることもできるだろう。

そしてこの年の夏、十八歳で女学校を卒業したばかりの末娘、持子の妊娠が発覚する。当初おたかは狼狽したり憤ったりしたが、やがて「相手がどこの誰にしろ、持子をくれてやる」と覚悟を決める。しかし持子

のお腹の子の父親は、結核のため、ついこの間、この世を去っていたのである。

その年の秋に、朝日理髪店一家は郊外へと引っ越した。かつての近所のひとびとは、「おたかは人も到頭いたたまれんようにならした」と噂する。六人の子供たちが誰も結婚できぬまま、末娘が妊娠したといった状況に、世間体を気にするおたかは耐えられなくなったのではないかというのだ。

翌年、持子に男の子が産まれたが、出産のとき、おたかは「襷を掛けて、鉢巻しかねなかった」。それほどまでにおたかは、意気込んで娘の出産に臨んだということなのだろう。

赤ん坊ができると、それまで厚身のせまい思いをしていた持子も、「ピチピチと若い母めいた」。子供たちの生活は活気づき、大声をあげて赤ん坊の奪い合いなどをするようになって、「家の中はめきめき明るく」なったのである。

物語は、赤ん坊の誕生日に、おたかが娘たちを引き連れて記念写真を撮りに行くところで終わっている。「おたかは六十近いのに腰一つ曲らず、しゃんとしていた」という一文は、一家の中心にいる母親の、歳をとりながらも活力に満ちた姿を表現したものだといえるだろう。

世間体を気にかけ、見栄を張って生きてきたおたかであったが、気づいてみれば、世間体だの見栄だのといったことは無関係なところに、一家の幸せはあった——そんなふうはこの小説を読むこともできるだろう。短い物語のなかで事件は次から次へと生起し、最後は思わぬ展開を見せる。そんな語り口の妙味も、本文からぜひ味わってはしい。

【設問解説】

問1 語句の意味を答える問題

大学入試センター試験の小説問題では、毎年、この問1のような問題が出題される。これは基本的には、傍線部の言葉の語義そのものを問う知識問題である。単に傍線部前後の文脈だけを根拠にするのではなく、傍線部の語句それ自体の辞書的な意味を推察し、その意味から外れていない選択肢を選ぶということが肝要である。

(㉞)では、「当座」と「小気味良さ」という二つの語の意味が問われている。まず「当座」だが、これは「その場、さしあたり、一時、しばらくの間」といった意味。「当座をしのぐ」とか「当座の間に合わせ」とかいった使い方をする。次に「小気味良さ」だが、これは「気持ちがよい、気分がすっきりするよな」といった意味である。以上の二つの言

菓の意味にきちんと対応している正解は②しかない。①は「当座」の意味が違っており、④は「当座」についての言及がない。⑤と⑥は「小気味良さ」に該当する部分の意味が違っている。

(4)では、「気性」と「呑み込んでいた」の意味が問われている。「気性」とは単に「気持ち」といった意味ではなく、「生まれつきもつている性情、気だて、気質」といった意味である。したがって、この時点で②・③・⑥は誤りだと判断できる。「呑み込む」はいろいろな意味のある言葉だが、ここでは文脈から、仲人がおたかの気性をへわかつていた」というような意味だと判断できる。したがって正解は①である。「独特」が気になったという人もいるかもしれないが、人が生まれつきもつている気性というのはその人に固有のものだし、縁談の申し出に対して妙に意固地になってしまうといったおたかの性格は、明らかに「独特」なものである。④がやや紛らわしいが、「呑み込む」というのは何かを自分の腹のなかに収めるといったニュアンスのある言葉だから、「合わせようとしていた」よりも「心得ていた」のほうがその言い換えとしてはふさわしいと判断できるだろう。

(5)では、「喧しく」と「取沙汰した」の意味が問われている。新聞やテレビのニュース番組などで、しばしば「……が取沙汰される」といった表現を見聞きするが、これは「……が話題になっている、評判になっている、うわさになっている」といった意味である。したがって正解は①か②。そして「喧しい」には「陰で」といった意味はないから、正解は②だとわかる。「とやかく」とは、「多くの人々があるやこれやとものを言う」といった意味合いで使われる言葉である。③と④は「喧しく」の言い換えにはなっているが、「取沙汰した」に対応する内容がない。⑥は「喧しく」にも「取沙汰した」にも無関係な内容である。

問2 物語の舞台となっている一家の事情などについて答える問題

傍線部には「随分近所の評判になった」とあるが、何が「評判になった」のだろうか。評判になったのは、朝日理髪店が、亡くなった先代の供養という名目で、大量の菓子配ったことである。さらに13行目を見ると、「しぜんそんな供養もひとつにはうなずけた」とある。つまり周囲の人々にとって、朝日理髪店が大量の菓子配ったことには、納得できる理由があったということだ(→d)。では、その理由とは何なのかを確認していこう。

傍線部に続く部分を見ると、大量に配られた菓子袋には店の名前が入っており、それは「宣伝のため」だととりあえず説明されている(4行目)。しかしここでいう「宣伝」とは、単に店の名前を知らしめたいといったことではないだろう。【本文解説】①の最後でも説明したとおり、主人に先立たれた母親のおたかには、これからも私たち一家のことをよろしくとばかりに近所に気配りをしておく必要があった。そのために、彼女は大量の菓子を配ったのである(→c)。

では、なぜおたかは近所に気配りをしなければならなかったのか。その理由は朝日理髪店一家の抱えていた事情にある。

まずは家業の理髪店を継ぐべき長男、永助の問題である(→a)。亡くなった先代は「理髪養成学校の創立委員で、教師にも嘱託され」た人物であったため、それと比べてしまうと、永助はまだ店を継ぐには未熟だった。しかも「高慢たれで、腕はともかく客あしらいは存分にわるい」ということは、おたかにもわかった。彼女が供養のために巨額の金をかけたのには、まずこのような事情があったのである(7行目)。

もう一つは、家に六人もの子供がいるという問題である(→b)。長女の義枝と次女の定枝は当時の通念でいう「適齢期」であるが、まだ結婚していない。また、永助が客を相手に理屈っぽい話をするような青臭いところがあるのも、彼が三十二歳になって独身であることと無縁ではないように思われた。しかも家には、十代の子供がまだ三人もいる。おたかは「病氣一つ出来ぬ後家」であり、娘の結婚が遅れているのも自分の「責任」(9行目)ではないかと感じるような「肩身のせまさ」(13行目)もあった。こうしたことも、おたかが菓子配ることになった要因なのである。

以上の内容をまとめると、次のようになる。

- | | |
|---|---|
| a | 長男の永助は、理髪店の跡継ぎとしてはまだ未熟だった。 |
| b | しかも一家には、これから結婚や成人を迎える子供たちが数多くいる。 |
| c | (a・bであるため)おたかは近所に気配りをしなければならず、供養に金を使った。 |
| d | 近所のひとびとは、そうした事情について納得していた。 |

これらの内容を過不足なく説明している③が正解である。「地元ではそれなりに知られた店主」というのは、先代が「理髪養成学校の創立委員」(5行

目)で「町会の幹事」もしていた(26行目)ということ指している。「まだ器が小さく」とあるが、ここでいう「器」というのは、人間としての器量、力量といった意味。したがって「後継としてまだ器が小さく」というのは、後継者としてはまだ未熟だという意味である。

①は、「店の宣伝」に関することに終始しており、子供たちの問題について一切ふれていない点で、正解にはならない。また、「店は存続が危ぶまれるようになり」というのも本文から確定できない内容。さらに、「近所の人々は同情した」というのも、傍線部の「評判になった」と対応していない。

②も、①と同様、子供たちの問題についてまったくふれられていない。また、周囲の人々が「何か後ろ暗いことでもあるのではないか」とうわさしたというのも、本文から読み取れない内容である。

④は、「長男はどう見ても実力不足」が不正確。6〜7行目に「腕はともかく客あしらいは存分にわるい」とあるのだから、理髪師としての技術はそれなりにあるのだと考えられる。また、周囲の人々がおたかに「同情」していたというのも、本文からは確定できない内容である。

⑤は、「腕前も未熟」が、④と同じく本文の6行目と矛盾する。また、理髪店は長男が継ぐとすでに決まっているのだから、「他の子供たちも家業を継ぐ意思をもたないらしい」という理由で、おたかが周囲に気配りするという理屈もおかしい。

問3 子供たちへの縁談を何度も断つたおたかのありようについて答える問題

傍線部を含む一文には「そういうことがあって、いま義枝は二十九」とある。これは14行目の「三年は瞬く間だった……おたかがふと義枝の年教えてみると、うかうかと二十九だった」という表現と対応している。したがって傍線部の「そういうこと」とは、16行目から傍線部直前までの内容すべてを含んでいると考えることができる。そしてこの部分には、父親の存命中、死後を通して、何度も子供たちに縁談がもちこまれたということが書かれていた。この部分の内容について、あらためて整理してみることしよう。

まずすぐにわかるのは、**何度も縁談がもちこまれたが、そのすべてがまともになかった**ということである(→a)。しかもそれらの縁談のほとんどは、**一家にとってさほど悪い話ではなかった**。とくに次女の定枝のところに来た話(32〜44行目)は、相手が小学校の教員ということで「世間態(≡世間体)」

も良く、「**纏らねば嘘だった**」。また、三女の久枝のところに来た話(45〜50行目)も、相手が銀行員ということで、おたかにしてみれば「もう飛びつきたい話」だった。けれどもそれらのすべてを、おたかは断ってしまったのである。

ではなぜ断つたのか。その理由は二つある。一つは、**おたかの独特な性分・気質**である(→b)。たとえば、父親の死後まもなくあった長女への縁談のときには、おたかは「相手の身分も訊かぬうちに」まるで「**喧嘩腰**」のような勢いで話を断ってしまう。そして、これは彼女がただ「**意固地**」になっていただけなのだ(20行目)。また、次女の定枝への縁談のときには、「断るほどの理由もはつきりとはなく」、しかし仲人と話をしているうちに気持ちが「**いつものところへ落着いて**」、結局のところ断ってしまったのである(40〜43行目)。

もう一つの理由は、**おたかが世間体を気にかけていた**からである(→c)。これについては、次女への縁談の場面で、相手が小学校の教員なのは世間体が良いとおたかが喜んでいといったことが書かれている(34〜35行目)。また、「**格式が違うことあれしまへんか**」という決まり文句も、やはり世間体を気にするがゆえに見栄を張っていたからだと思えることができるだろう。さらにいえば、三女の久枝への縁談を断つた理由は、「**近所の評判**」を気にしたからだ(48行目)。

さらに注目してほしいのは、**縁談を断つたあとのおたかのようす**である(→d)。仲人を怒らせたりするほど威勢よく話を断つておきながら、彼女はあとになって「**むなしい寂しさ**」を感じている。そして、自分に対して「**いいわけ**」をし、さらには「**責任**」まで感じるといったことを、繰り返していたのである(24〜26行目)。

以上の内容をまとめると、次のようになる。

- | | |
|---|---|
| a | 子供たちのところに何度も縁談がもちこまれ、なかには良い話もあったが、そのすべてはまともになかった。 |
| b | おたかがいつも縁談を断ってしまう理由の一つは、彼女の独特な性分にあった。 |
| c | もう一つの理由は、おたかが世間体を気にしているからであった。 |
| d | 一方でおたかは、自分で話を断つておきながら、寂しさや責任を感じ、自分にいいわけをしたりもしていた。 |

これらの内容をまとめた③が正解である。

①は、おたかが縁談を断つた理由についての説明

が間違っている。「長女を差し置いて無理に次女と縁組みしようとする」ことはできないというのは、仲人の言葉(39行目)や、おたかが自分に言い聞かせていること(49、50行目)であって、彼女が縁談を断り続けた本当の理由は、やはりbとcなのである。また、「どうしたら自分の娘たちを幸せにすることができるのかと、いつもあれこれと思索するしかなかつた」というのも、本文から確定できない内容である。

㉒は、傍線部直前の段落の内容、つまり三女の久枝のところに来た縁談の話題に限定されている点が決まらず。傍線部の「そういうこと」とは、16、50行目の内容すべてを指しているのである。また、「同じ職場に勤めている男性から」の縁談を断った理由は、「格式の違い」からではない。銀行員であるという点で「格式」は充分だったのだが、「近所の評判」が気にされたのである。

㉓は、おたかが「自分の信じる道を行くしかない」と居直るような態度しかとれなかつた」というのが、先のdと矛盾している。

㉔は、おたかが相手の「人となり」を気にしていたというのが誤り。「人となり」とは、人柄・性格といった意味だが、おたかが気にしていたのは相手の人柄ではなく、職業や社会的立場である。

問4 傍線部に至るまでのおたかのありようについて答える問題

傍線部の少し前の部分で、朝日理髪店の近所に花井という若い男が越してきて、おたかがこの男と娘のうちの誰かとの縁組みを考えているらしいということが書かれている。しかし、その花井は突然、他人の金を使い込んで夜逃げをしてしまう。「うまく災難をのがれた」ともいえるが、やはりおたかにとっては、子供たちの結婚をめぐる、思うように事が進まないといったことがまた繰り返されたということになる(→a)。

するとその後、末娘の持子の妊娠が発覚する。おたかにとっては、**「またもや不本意なことが生じた」というわけだ(→a)**。しかしおたかは、狼狽したり憤つたりしたあとで、「**相手がどこの誰にしる、持子をくれてやる」と吐き決める(→b)**。ところが持子の相手は、すでに死んでしまっていた。おたかにしてみれば、**「さらに予想外の事態に直面した」というわけである(→c)**。そしておたかは、「べたりと尻餅をついた」。これは、怒つているとか嘆いてるとかということよりも、むしろ緊張の糸が切れ、驚きあきれているさまを示している表現と考えるべき

だろう(→d)。

以上のことから、傍線部に至るまでのおたかについては、次のようにまとめられる。

- a 子供たちの結婚をめぐる、思うように事が進まないといったことが繰り返された。
- b 末娘の妊娠を知り、その相手が誰だろうと娘をくれてやると、覚悟を決めた。
- c しかし、さらに予想外の事態に直面した。
- d 緊張の糸が切れて驚きあきれたような気持ちになり、思わずべたりと尻餅をついた。

これらの内容に最も即している㉒が正解。「家のことを案じながら気ぜわしく月日を送ってきたおたか」というのが気になったかもしれないが、おたかが縁談のことであれこれ悩んできたのは、彼女なりに一家のことを考え、「責任」(26行目)を感じたりしてきたからだ。また、57行目には「おたかはいよいよ焦つた」とあり、彼女が「気ぜわしく(=心が落ち着かないさま)」していたというのも間違いではない。

㉓は、選択肢後半の内容が誤り。子供たちはおたかに「造反(=たてつくこと、反抗すること)」などしていないし、おたかが「いまの暮らしを続けていく自信を失つて」いるわけでもない。

㉔は、「子供たちが……自分の気持ちをわかつてくれていなかった」というのが、本文から確定できない内容である。

㉕は、「母親の苦勞もわからず好き勝手なことをしている子供たち」というのも本文からうかがえない内容であるが、それ以上に、「生活は心機一転させるのも悪くないだろうと考えている」というのがおかしい。おたかがこの時点で転居などを考えていたかどうかは、本文からはまったく読み取れないことである。

㉖は、選択肢後半の内容が先のdに反している。傍線部でのおたかの気持ちは、「憤り」というよりも「驚きあきれる」といったところだろう。ましてや彼女は「運命を呪うような気持ち」になっているわけではない。

問5 傍線部の表現について答える問題

傍線部の「腰一つ曲らず、しゃんとしていた」というのは、もちろんおたかが元気であるということを示すものである。では、ここでなぜおたかの元気が強調される必要があるのか。その点を考えてみよう。

朝日理髪店一家では、誰も結婚できぬまま、末娘

の妊娠が発覚した。隣近所の目に耐えられなくなったおたかは引越しを決意するが、その新居において一家は、思いがけずそれなりに充実した生活を手に入れることになる。

きっかけは環境の変化もあつただろうが、それ以上に大きかつたのは末娘、持子の出産だった。出産のとき、おたかは「襷を掛けて、鉢巻しかねないほどの勢いで張り切った。赤ん坊が生まれると、家族全員で声をあげてその子を奪い合うといったことが起きようになる。持子は生き生きとし、他の家族たちも活気づいて、「家の中はめきめき明るく」なった。つまり、**家族は活気に満ちた生活を送るようになり、赤ん坊をめぐってまとまるようになった**ということである(↓a)。

そしておたかは、そんな一家をこれまで引っ張ってきた母親である。いわばおたかは、**家族の中心に存在する**のだ(↓b)。そんな彼女は、「六十近いのに腰一つ曲らず、しゃんとしていた」。傍線部で描かれているのは、**元気で強く、たくましい母親の姿**なのである(↓c)。

以上の内容をまとめてみよう。

- | | |
|---|--|
| a | いつの間にか朝日理髪店一家は、赤ん坊をめぐってまとまり、活気に満ちた生活を送るようになった。 |
| b | おたかは、そんな一家の中心的存在である。 |
| c | 傍線部には、そうしたおたかの元気でたくましい姿が描かれている。 |

これらの内容に最も即した選択肢という観点から、⑤を選ばばよいだろう。「したたか」とは、近年では〈図々しい〉といったニュアンスで使われることも多い言葉だが、基本的には〈強い〉という意味。「平俗な言葉で」というのは、「しゃんとしていた」といった平易でくだけた言い回しが使われていることを指していると考えればよい。

①だが、おたかが「娘たちを社会的地位の高い男性のもとに嫁がせ」ようとしていたというのは事実であるものの、それが「一家を繁栄させよう」としてのことだったかどうかは、本文から確定できない。また、朝日理髪店一家が「食しい」暮らしをしているかどうか、本文から読み取れないはずである。

②は、「一家にさまざまな事件が降りかかった」という言い方も大げさだが、それ以上に、おたかがつねに「前向き」で「覇気に満ちた態度」をとってきたと書かれている点がおかしい。問3でも確認したように、おたかは妙に気落ちしたり責任を感じた

りといったことも繰り返していたのである。

③は、選択肢前半の内容も本文から読み取りがたいが、それ以上に後半の内容が大きな誤り。「六十近いのに腰一つ曲らず、しゃんとしていた」という表現から「物悲しさ」を読み取るということは不可能であろう。

④は、「災難に見舞われるような経験」という表現もやや大げさだが、おたかが「娘以上に、気持ち若々しかった」かどうかは、本文から読み取れない。また、「母親のこれからの人生に託す希望」というのも、やはり本文から読み取ることのできない内容である。

問6 本文の表現の特徴について答える問題

近年の大学入試センター試験における小説問題の問6に準じた形式の出題になっている。一つ一つの選択肢について、真偽や本文との対応などを丁寧に検討してほしい。

① 本文は朝日理髪店の先代主人の葬礼の場面から始まり、その八年後(70行目)に末娘の妊娠が発覚したことが記され、さらにその翌年(81行目)に出産があつたことが書かれている。また、21〜27行目には先代がまだ生きていた頃の縁談の話も書かれているから、「十年ほどに及ぶ一家の様子」が描かれているというのは、とくに間違ではない。また、【本文解説】②でも確認したとおり、出来事は必ずしも実際の順序どおりに描かれているわけではない。しかも、小説中ではさまざまな出来事が起きるが、一つの出来事はあつという間にけりがつき、すぐに次の出来事が描かれる。これは「展開の速さ」だということができよう。しかもそうした展開の速さゆえに、読み手は昔話やマンガなどを読んでいるような感覚にとられる。したがって、「作品全体に漂うユーモラスな雰囲気」というのも間違ではない。以上のような理由で、この①は正解である。

② たしかに本文では、せりふが「」で括られないまま挿入されている。しかし、それが「おたかと作品の語り手とを一体化させ」ているとは考えられない。「おたかと作品の語り手」が「一体化」しているというのであれば、作品全体がおたかの視点から描かれているということにもなってしまうが、この作品は全編にわたって、超絶的・客観的な視点から描かれている。

③ 「だらだらと」はほぼ間違いなく擬態語であろうが、「うかうかと」が擬態語だといえるかどうかは微妙なところである。まして「かねがねの」と

いうのはへかねてから、前々から」という意味で、擬態語ではない。したがって、この選択肢は誤りである。また、「だらだら」とは仲人の話し方についての描写であって、おたかについて使われている言葉ではない。したがって、これらの言い回しが「おたかの性格を表現する」というのも、明らかな誤りである。

④「娘たちの間に母親への反抗心が芽生えはじめている」ということを証拠立てるような記述は、本文中にはまったくない。本文からはわからない内容を答えるにはできないのである。「ぞおとした」という表現は文字どおり、おたかがまだ独身である娘たちを見て、ちよつと怖いような気分になったということであろう。

⑤「分不相応な幸せを求めるものは必ず不幸になってしまう」といった教訓めいた内容を、本文から読み取することはできない。また、本文の筆者は何かを「教諭」そうとしているわけでもない。もちろんこの選択肢は誤りである。

⑥ 問3などでも確認したとおり、おたかには世間体を非常に気にするようなところがある。つまり彼女は、「世間」や「周囲の人々」のことが気になるのだ。「いまは、誰を貰ってもらうつもりやろ」とか「そらえらい良えとこイあんだ、行きはりまんねんなア」とかいった言葉は、まさしくそうした「周囲の人々」の言葉であり、「世間」が朝日理髪店一家やおたかのことをどう見ているかということが、そこには示されている。以上のような理由で、この⑥も正解である。

第3問 古文

【出典】

『別本八重葎』

成立 鎌倉時代かとされるが、定かではない。

ジャンル 擬古物語

作者 未詳

内容 「八重葎」とは幾重にも茂る蔓草のことであるが、手入れがされず荒れた庭や邸の形容としても用いられ、ここでは物語の舞台となる姫君の荒れた邸のことをさしている。

都の荒れ果てた邸に住む姫君は、都を遠く離れている恋人の大將から何の便りもないことを嘆きつつ日々を過ごしていたが、季節が秋を迎えたある夜、大將が何の前触れもなく姫君のもとを訪れてきた。姫君は病気のせいで会うことができず、大將は夜明け方に帰っていったが、その後姫君と手紙をやりとりし、再訪の約束をとりつける。しかし、たまたま通りかかった阿闍梨の君が邸の異変に気づき、昨夜訪れた大將は、実は、狐がなりすましたものであったことを見抜く。その夜再訪した狐は、阿闍梨の君の祈禱による仏の加護が強かったのか、退散を余儀なくされ、姫君の身は守られる。本物の大將は、その後八月に帰京したが、姫君のもとを訪れることはなかった。そして十月の中旬、大將の一行が姫君の邸の前を通り過ぎる。姫君の侍女である侍従は、大將を呼び止めようと、夫を介して大將の従者に手紙を届け、邸へと招き入れるのだが、そこにいた犬がほえかかると、一行は叫び声をあげて逃げていった。そのことにより、この時の大將もやはり狐の変化なのであったとわかるところで物語は終わる。

この『別本八重葎』は、『源氏物語』の「蓬生」の巻を下地として構想された短編で、『源氏物語』をモチーフとした数多くの物語の一つである。「蓬生」の巻は、未摘花の君と呼ばれる姫君が、都を離れ明石にさすらう光源氏を、荒れた邸でじつと待ち続けて、光源氏が都に戻った翌春にようやくその訪問を受け、後には光源氏の別邸に引き取られるという内容であるが、この『別本八重葎』では、光源氏を待つ間に、未摘花の君が狐にだまされそうになるというような物語になっている。すなわち、この『別本八重葎』は、荒れた邸で都を離れた男を待つ女という設定や、侍従や阿闍梨の君といった登場人物

など、「蓬生」の巻に描かれた要素を多く取り込みつつ、変化のものにつけ込まれてしまいうあわれな姫君という、作者独自の世界を描き出した作品となっている。

本文は、笠間書院刊『鎌倉時代物語集成 第5巻』所収のものによるが、読解の便宜を図り、一部表記を改めている。

【本文解説】

今回の本文は物語全体の中盤にあたり、前書きにあるように、姫君は気分がすぐれないために大将に会えず、大将が帰っていくところから始まる。

雨の中、大将一行が出ていくと、年老いた女房たちは、気分が悪いとはいえ、ようやく訪れてくれた大将に会わなかった姫君に腹を立てる。夜も明けたが、姫君は依然として起き上がれないでいたところ、大将の使いが手紙を持ってくる。姫君に会えなかった悲しみを訴え、今夜会えるだろうかと言ってよこしてきたその手紙に対し、侍従が姫君の代わりに歌を詠み、今夜来てほしいと伝える。そこに、院の病氣平癒の加持祈禱のため、比叡山から下りてきた阿闍梨の君がやってきて、この邸に病人がいるのではないかと問う。人々が姫君のことを告げると、阿闍梨の君はこの邸によくはないものの気配を感じたと言ひ、姫君はどのような病氣かと尋ねる。と、その時、阿闍梨の君が几帳の端にあった手紙をめざとく見つけ、「これがまずよくないものだ」と言つて手に取ると、それは大きな蓮の葉であつた。ここで、今回の本文においてははじめて、大将が人ならぬものであることが示される。侍従が大将からの手紙だと思つていた濃い緑の紙は、実は大きな蓮の葉であつたのだ。大将になりすましたものが、侍従たちを幻惑させていたのか、それとも本当に葉を紙に変えてしまう妖力をもつていたのかは定かではないが、いずれにせよ普通の人間にそのようなことができるはずもない。侍従は、それでは昨夜からのできごとはいったい何だつたのかと思つて身の毛もよだち、恐ろしさにふるえる。そして、昨夜大将が来たことを阿闍梨の君に伝えると、阿闍梨の君は、姫君に仕える者たちが頼りないから怪しいものにつけこまれるのだと嘆き、狐などの変化のものの恐ろしさを口にする。昨夜の大将が変化のものとなり、人々は阿闍梨の君のもとに集まつて恐ろしさにふるえた。

日も暮れ、雨もしきりに降る中、阿闍梨の君は夜通し仁王経を読む。夜中を過ぎるころ、ついに変化のものがやってきて、姫君の枕元で音をたて、あちらこちらの障子を明けようとしたが、仏の加護の強さであつたのか、まもなく夜は明け、姫君たちはことなきを得

た。阿闍梨の君がいなかつたらどうなつたことかと、皆の恐怖は尽きることはなかつた。

この本文では「大きな蓮の葉」をきっかけとして、訪れた大将が実は変化のものであつたことがわかるが、そこに至るまでに、使いの姿を「糞虫」にたとえたり、手紙を「濃き緑の紙のあやしきかうばしき」と「蓮の葉」を連想させるように描いたり、大将が変化のものだと示唆する表現が用いられ、物語に面白味を与えている。この本文だけでは、変化のものの正体が何なのかははっきりとわからないが、物語全体を見ると、阿闍梨の君が狐の存在を口にするもののほか、変化のものが犬の吠える声に逃げることなどから、それが狐であることが明らかにされていく。さらに、物語の末尾には「蘭菊の叢」という表現があり、これが『白氏文集』の「狐は蘭菊の叢に藏る」の引用であることから、やはり狐であつたとわかるようになっていく。

【全文解釈】

雨がしとしと降る中に、(大将の乗った)御車の音がして出ていきなかつたので、年老いた女房たちは、茫然として、(大将を)外(で待たせた状態)のまま帰し申し上げる気の毒さを口をそろえて言つては、姫君をとがめ非難して、泣いてしまいそうなほど腹を立てて騒ぐ。夜も明けてしまった。姫君は依然としてたいそう苦しうになさつて、御粥なども手をつけなさらず、起き上がりもなさらぬところに、(大将からの)お手紙がある。(大将の)お使いは、糞虫のような姿で参上してきた。侍従が(手紙を)受け取つて見る。「昨夜は(草の上に)置いている露も(会えなかつたせいで流れる私の)涙も払う方法もなく、せつなかつたことだなあ。

雨が激しく降る時に訪れたけれども(あなたが私に)会つてくれないので、(降る雨だけでなく悲しみの涙に)濡れながら私は帰つて来たことだ。長い道のりを。

昨夜は帰つた。今夜はそれでは(会えるのだろうか)」など多く(言葉を費やし)て、濃い緑の紙で不思議なほどよい香りがするものに、お書きになつていた。(姫君は)お返事など、(病のせいで)いうまでもなく書けそうにもないご様子なので、(代わりに)侍従が(お返事を)差し上げる。「昨夜はどのようなついでで(いらつしやつたのでしょうか)か。

夜が明けきらぬ頃の空から降る雨(に濡れたこと)を、(あなたが)帰つて行く袖の涙のせい(で濡れた)として嘆かないでほしい。

(昨夜のことが)夢か現実かとは(今夜来て決めてほ

しいことです」などすばやく返歌を詠み、(それを書きつけたものを) 包んで (使いに) 渡した。今夜ぐらいはやはりお会いになるのがよいようなことなどを(皆が) 口々に言うときに、比叡山の阿闍梨の君で、近頃院が体調をくずしていらつしやる(ので、その)ご祈禱のために(院が) 招き(比叡山から) 下山させなされた方が、不意に参上なされた。(邸を) 覗きなされるやいなや(辺りを) 見回しなされて、「この邸には、体調のよくない病人などがいるか」とお尋ねになる。人々が、姫君が昨夜から体調をくずしていらつしやる旨を申し上げると、「本当にそうであったよ、よくないものの気配がするのを見つけたので、通り過ぎることができませんで、参上したのだ。どのようなご病気であろうか」などとお尋ねになる時に、御几帳の端にあつたお手紙で(しかも) 巻かれた(状態の) ものをめざとく見つけなされて、「これがまずよくないものである」と言つて(手に) お取りになるのを見ると、大きな蓮の葉であつた。侍従は、頭の髪の毛も立つ(てしまふほど恐怖のためぞつと)して、「どのようであることでしょうか」とぶるえて言うと、(阿闍梨の君は)「このようなものが、どのようにして、(姫君の) おそば近くに参上して来たのか」とお尋ねになる。姫君も、この阿闍梨の君がいらつしやつたことをお聞きになつて、やつこのことで御頭を持ち上げなされる。阿闍梨の君が、近く寄つていらつしやると、侍従は、昨夜のことを体をふるわせて口にした。(阿闍梨の) 君は、「いやもう、あなたたちが頼りないので、邪悪なものが我が物顔にふるまうのである。このように荒れて(人)気も少ない所には、狐などといった獣たちも、人の魂にとりついてだますことをするのだ。下手をすると(魂を) 取られたりもするのだ」などと険しい口調でおつしやるので、姫君は、気味悪く恐ろしいとお思ひになる。年老いた女房たちは、こちらに寄つてきて、「大切な僧侶様、この災難を、お助け下さい」と手をすり合わせて(拜んで) は、みな怖がつている。(阿闍梨の君は)「今夜はずつと起きていてお経を讀みましょう。人々は、姫君のお側を離れないでいらつしやい」などとおつしやる。

日が暮れゆくにつれて、雨もしきりに降るが、阿闍梨の君が、夜居(一僧が一晩中、加持祈禱のために起きていること)の僧になりなされて、声はたいそう尊くて、仁王経をお讀みになる。人々は、この阿闍梨の君一人を高い山(のようにゆるぎないもの)と頼りにして、御几帳の辺りに寄り集まりながら、ふるえて座つていた。夜中を過ぎる頃に、風までも荒々しく吹き出したので、化け物が今夜来ようと言つたことよと、そこにいる誰もが生きた心地もせず(にいたところ)、

ただこの(姫君の) 枕元に、何かの音がみしみしと聞こえて、あちこちの障子なども揺すつて開け(ようとす)るように思われる。けれど、このようにして(仏の)ご加護が強くていらつしやつたためであろうか、特に変わったこともなくて、夜も明けていくので、少し気を落ち着けて、姫君も起きて座つていらつしやつた。この(阿闍梨の) 君がいらつしやらなかつたならば、危うく鬼に一口に食われるにちがひなかつたことよと思うと、やはり恐ろしいことはこの上ない。

【設問解説】

問1 短語句の解釈問題

大学入試センター試験の古文の問1では、短語句の解釈が三題出題される形式が定着している。古語の意味や文法の基礎知識のみで解答できる場合もあるし、古語の意味はわかっても、さらなる文脈判断が必要となる場合もある。いずれにせよ古語や文法などの基礎知識の習得が第一であることは言うまでもない。

㊦ 「帰し奉るいとほしさ」

「帰し／奉る／いとほしさ」と単語に分けられる。ポイントは「奉る」「いとほしさ(形容詞「いとほし」に接尾語の「さ」がついて名詞化したもの)」である。

奉る(三行四段活用動詞)

- 1 差し上げる。 : 謙譲の本動詞
- 2 へ申し上げる。 : 謙譲の補助動詞
- 3 召し上がる。 : 尊敬の本動詞
- 4 着なされる。 : 尊敬の本動詞
- 5 お乗りになる。 : 尊敬の本動詞

いとほし(シク活用形容詞)

- 1 かわいそうだ。気の毒だ。
- 2 かわいい。いとしい。いじらしい。
- 3 いやだ。つらい。

まず「奉る」は、「帰し」という動詞の下に接続していることから補助動詞だと考えられ、前記2の謙譲の補助動詞であるとわかる。ここで、㊸「お帰りになつた」、㊹「帰りなされる」と「奉る」を尊敬で訳している選択肢は不適切であると判断できる。そもそも「帰し」は「帰す」という他動詞なので、「帰る」と自動詞で訳している点でも㊸と㊹は間違いだと言えらる。次に、「いとほしさ」の意味を確認すると、前記の「いとほし」の語義には、㊶の「気の毒さ」、㊷の「いじらしさ」が該当し、ここで正解は㊶と決まる。文脈を確認すると、ここは「老人

どもは、…外ながら帰し奉るいとほしさを言ひ合はせつつ、姫君をあはめにくみて」という箇所、「あはめ」は難しいが、「軽蔑する。うとんじる」という意味の語であり、老女房たちが大将に会わなかった姫君をうとんじ憎むという場面である。そして、これは中に入れないまま帰さざるを得なかった大将には同情しているということだと考えられるので、②「帰し申し上げる気の毒さ」で問題ない。しかし、①の「薄情さ」や④の「意地の悪さ」も、文脈にあてはめるとそれなりに意味が通じるので、ここでは「いとほし」の正確な意味を押しさえられたかどうかは解答の決め手となる。

(4) 「からかりきや」

「からかり／き／や」と単語に分けられ、いずれの語もポイントである。

からし(ク活用形容詞)
 1 塩辛い。
 2 つらい。苦しい。せつない。
 3 いやだ。不快だ。
 4 危ない。あやうい。

き(助動詞)
 した。(過去)

や(係助詞／終助詞)
 1 しか。
 ……疑問の意を表す係助詞
 2 しか、いや、くない。
 ……反語の意を表す係助詞
 3 くなあ。くよ。
 ……詠嘆の意を表す終助詞

まず、「き」が過去の助動詞であることに着目すると、③の「大変な目に合うだろうか」というのは、まだ起こっていない未来のことを推量する形になっているため、不適切である。次に「からし」の意を考えると、②「危ない」、④「せつない」が前記の語義に該当する。文末の助詞「や」には前記のように疑問・反語を表す場合と詠嘆を表す場合とがあり、いずれの意になるかは文脈で判断するしかないが、ここでは「からし」が正しく訳されている②と④はどちらも詠嘆表現となっているので、前記3の詠嘆の意であるとわかる。②と④は語義からは決められないので、文脈を確認すると、傍線部は、昨夜訪れた大将からの手紙文中にあり、「昨夜は置きたる露もはらはん方なくて、からかりきや」と続いている。直前にある「露」は「涙」の比喩として用

いられる場合が多く、この部分でも、姫君に会えなかった悲しみの涙を「露」にたとえ、その涙を拭く方法もないと言っている。よって、それに続く表現としては、②の「危ないところだったよ」では意味をなさず、④の「せつなかつたことだなあ」が正解だと決まる。

(5) 「さらすものし給へ」

「さら／ず／ものし／給へ」と単語に分けられ、ポイントは「さら」「ものし」「給へ」である。そのうち、「さら」は動詞であるが、「然り」というラ行変格活用動詞と「避る」「去る」というラ行四段活用動詞の可能性が考えられる。

然り(ラ行変格活用動詞「さあり」の縮約形)
 1 そうだ。そのようだ。
 (「然らず」の形で「そうでない」の意を表す)
 避る(ラ行四段活用動詞)
 1 避ける。よける。
 (「避らず」の形で「避けられない。やむを得ない」の意を表す)
 去る(ラ行四段活用動詞)
 1 離れて行く。遠ざかる。
 2 近づく。来る。
 3 官位を退く。
 4 変化する。

ものす(サ行変格活用動詞)
 1 ある。いる。
 2 行く。来る。
 3 生まれる。
 4 種々の動詞の代わりに用いる。(具体的な動作を文脈から考えて訳す)

給ふ(ハ行四段活用動詞／ハ行下二段活用動詞)
 1 お与えになる。
 ……尊敬の本動詞(四段活用)
 2 くなさる。おくになる。
 ……尊敬の補助動詞(四段活用)
 3 くなさせていただきます。くします。くしてあります。
 ……謙讓の補助動詞(下二段活用)

「さらず」「ものし」は複数の意が考えられるため、先に「給へ」を確認しよう。ここでは「ものし」という動詞に接続しているので補助動詞であり、前記2と3の可能性がある。活用の種類を確認するために、ここでの「給へ」の活用形を検討する

と、まず、会話文の最後で文末にあたることから、未然形や連用形ではないことがわかる。次に、傍線部を含む一文中に係助詞「こそ」はないので、係り結びにもなっていないため、已然形とは考えられず、この「給へ」は命令形であると判断できる。そして、それにより、前記2の四段活用の尊敬の補助動詞だとわかる。すると、尊敬の訳語もなく、命令形の訳にもなっていない②「避けてはならないのです」尊敬の訳語のない④「そのままにしてはいけません」は不適切である。残った選択肢の中で「さらす」の部分を正確にとらえているのは、「さら」を「去ら」の1の意味で解釈した①の「離れないで」しがなく、ここで正解は①だと決まる。「ものす」は前記4のように種々の訳語が考えられるため、③の「見張る」、⑤の「守る」のような言い換えは可能であるが、それにしても③や⑤には「さらす」の訳語がないことになり、やはり不適切である。正解である①の「離れないでいらつしやい」は「ものす」を前記1の「いる」の意味でとらえている。ここは、阿闍梨の君が、恐ろしさのあまり寄つて来た人々に対して「人々、姫君の御あたりさらすものし給へ」と言う箇所、その後者が「御几帳の辺りに頭をつどべつつ」と身を寄せ合っているのだから、その文脈から考えても、「人々は、姫君のお側を離れないでいらつしやい」ととらえるのがもっとも自然であると言えよう。

問2 文法問題

大学入試センター試験の古文の問2は、ほとんどが文法問題である。近年は同形語の識別を問うものが続いているが、「なり」「に」「る(れ)」「ぬ(ぬ)」「せ」「し」など、基本の語の識別なので、基礎学習ができていれば確実に得点できる。今回は「ぬ」と「なり」の識別を出題した。波線部を含む箇所をそれぞれ確認していこう。

a 泣きぬべく

b あるべうもあらぬ御様なれば

「ぬ」の識別

- 1 完了の助動詞「ぬ」の終止形。
↓活用語の連用形に接続する。
- 2 打消の助動詞「ず」の連体形。
↓活用語の未然形に接続する。
- 3 ナ行変格活用動詞の終止形活用語尾。
↓「死ぬ」「往(去)ぬ」の二語のみ。
- 4 ナ行下二段活用動詞の終止形(の活用語尾)。
↓「寝ぬ」「寝ぬ」など。

aの「ぬ」は、カ行四段活用動詞「泣く」の連用形である「泣き」の後に接続しているので、前記1の完了の助動詞「ぬ」の終止形である。直下の「べく」が終止形(ラ変型活用語の場合は連体形)に接続する助動詞であることから、完了の助動詞「ぬ」だと確認できる。bの「ぬ」はラ行変格活用動詞「あり」の未然形である「あら」の後に接続しているため、前記2の打消の助動詞「ず」の連体形である。直下の「御様」が体言であることから、「ぬ」は連体形であり、すなわち打消の助動詞「ず」だと確認できる。この時点で、選択肢は①・③・⑤に絞られる。

c まうでつるなり

d ことなること

「なり」の識別

- 1 断定の助動詞「なり」。
↓体言・連体形・助詞・副詞に接続する。
- 2 伝聞推定の助動詞「なり」。
↓終止形(ラ変型活用語の場合は連体形)に接続する。
- 3 ラ行四段活用動詞「なる」。
↓連用形・格助詞「に」「と」などの下に続く。「成る」の意味になる。
- 4 ナリ活用形容動詞の活用語尾。
↓「なり」の上の部分、物事の状態・性質を示す。

cの「なり」は、完了の助動詞「つ」の連体形「つる」の後に接続しているため、前記1の断定の助動詞である。文末にあり、終止形となっている。この時点で選択肢は①・③に絞られる。dは、直前が「こと」なので、これを名詞(体言)ととらえ、「なり」を断定の助動詞だと考えた人もいたかもしれないが、それでは「ことであること」と訳すことになり、意味をなさない。ここでは、「ことなる」で一語の形容動詞であり、「なる」は前記4の形容動詞の活用語尾となる。「異(殊)なり」と表記され、「違っている・異なっている・格別である・特別である」などの意を持ち、ここでは「特に変わった」と訳すとよい。類出の語なので、きちんと覚えておくようにしよう。もともと、形容動詞「ことなり」を知らなかったとしても、①はdを伝聞推定の助動詞としており、接続から考えてありえないので間違いだと思われるだろう。

以上の検討から、正解は③である。

問3 理由説明問題

まず傍線部の「頭の毛も立ちて」とはどういうことか。実際には頭の毛が立つはずはないので、何らかの状態の比喻表現だということになるが、思い浮かぶ類似の表現として、現代語の「身の毛がよだつ」がある。「恐怖のために身体の毛が立つ。ぞつとする」の意であるが、「頭の毛」というのはまさに「身の毛」であるので、「頭の毛も立つ」というのは、それらと同様の表現であると推測される。実のところ、古語としては、「かしの毛も太りて」は強い恐怖の表現としてしばしば用いられ、ここはその類似表現である。そこで、侍従がどのような状況で「頭の毛も立つ」状態になったのかを考えてみよう。

傍線部の前の部分は、阿闍梨の君と、侍従を含む邸の女房たちとのやりとりである。院の病を治療するために比叡山から下りてきた阿闍梨の君が、姫君の邸を不意に訪れ、「この宮には、例ならぬ病者などやある（＝この邸には、体調のよくない病人などがいるか）」と尋ねる。人々が、昨夜からの姫君の病状を伝えると、阿闍梨の君は、「さりや、よからぬものの気配するを見つけたれば、まかり過ぎがたくて、まうでつるなり（＝本当にそうであったよ、よくないものの気配がするを見つけたので、通り過ぎることができませんで、参上したのだ）」と言い、さらに姫君の病状がどのようなものであるかと尋ねる。その時、阿闍梨の君が「御几帳のはづれにありつる御文の巻かれたる（＝御几帳の端にあつたお手紙でしかも巻かれた状態のもの）」をめぐとく見つけ、「これまづよからぬものなり（＝これがまづよくないものである）」と言って手に取つたものを人々が見ると、それは「おほきやかなる蓮葉（＝大きな蓮の葉）」であつた。その後「侍従、頭の毛も立ちて」という表現が続くのだが、この文脈から考えると、侍従の「頭の毛」を立たせた直接の原因は、彼女が目にした「おほきやかなる蓮葉」だということになる。なぜなら、その蓮の葉は、阿闍梨の君が手に取る前は「御文」、つまり昨夜訪れた大将からの手紙であつたからだ。実際に葉が紙に変わって再び葉に戻つたのか、それとも人々が葉を紙だと思ひ込まされていたのか、それはわからないが、少なくとも侍従は「濃き緑の紙のあやしうかうばしき（＝濃い緑の紙で不思議なほどよい香りがするもの）」に書かれた手紙だと思ひ、返事までしたのである。それが、阿闍梨の君の手の中では大きな蓮の葉に変わつていた。阿闍梨の君が二度「よからぬもの」と口にしたように、そのようなものを届けたの

は、人間ではありえない。昨夜の大将が人間でないのなら、では昨夜から今にいたる出来事はいつたい何だつたのかと、侍従はその蓮の葉を見て思つたからこそ、「頭の毛も立ちて」「いかなるに（＝どのようであることでしょうか）」とふるえたのである。以上の検討により、正解は手紙が蓮の葉であつたとわかり「恐ろしくてたまらなくなつた」と説明している③と決まる。

①は、「頭の毛も立つ」を、「人間ではないものに恐怖する」ではなく、「阿闍梨の君の眼力に恐れ入つた」という方向性で書いているのが誤り。そもそも、阿闍梨の君は「よからぬものの気配する」のを感じ、大将からの手紙と思われたものの正体は見抜いたものの、この時点で「昨夜姫君のもとへやつて来た」者について何かを「言い当てた」わけではない。

②は、「実は大将は人間ではなかつたのだ」とこの時をはじめ気づき、ぞつとした」という部分は正しいが、「わざわざ大きな蓮の葉に和歌を書き付けてよこしたことを、不思議に思つていたが」とあるのがおかしい。この表現では、侍従が最初から手紙を「蓮の葉」だと認識していたことになる。しかし、侍従が見た和歌は「濃き緑の紙」に書かれてあつたと表現されているし、侍従も「紙」であると思つていたのでこそ返歌をしたのであるし、実はそれが蓮の葉であつたとわかつたからこそ、ぞつとしたのである。

④は、「姫君はこの先どうなつてしまうのだろうか」と、不安に駆られた」が誤り。この時、侍従が「いかなるに」と口にしたのは、手紙が蓮の葉であつたという事実を目の当たりにしたことによつて、まずは「これまでのできごとはいつたい何だつたのか」という疑問が生じたためであり、この時点で姫君の将来にまで思いをめぐらしているとは考えられない。「頭の毛も立つ」を「不安に駆られた」とするのもおかしい。

⑤は、全体が誤り。本文には、阿闍梨の君が姫君と大将の交際を反対したとか、侍従を責め立てたなどという記述はない。「腹立たしくてしかたなかつた」についても「頭の毛も立つ」を「怒髪天を衝く（＝頭髪の逆立つた、ものすごい怒りの形相）」と同意だととらえることはできず、この場面で侍従が腹を立てる要素が何も見当たらないので、やはり不適切である。

問4 行動の説明問題

傍線部の阿闍梨の君の行動は「『すくよかに』言

う」というものなので、まず「すくよかに」の意味を確認しよう。

- すくよかなり (ナリ活用形容動詞)
- 1 しつかりしている。丈夫である。
 - 2 気丈だ。心が強くゆるがない。
 - 3 無愛想だ。そつけない。
 - 4 きまじめだ。実直だ。
 - 5 固くこわばっている。ごわごわしている。

「すくよかに」の語の意味から考えると、①の「わけ知り顔で」と③の「不安げに」しか、はつきり誤りであるとは指摘できないので、解答を確定するには、傍線部の直前の「いで、そこたちのものはかなきに、……取られもするなり」という阿闍梨の君の発言内容を検討しなくてはならない。ポイントになるのは、係助詞「こそ」を用いて強調されている「いで、……ふるまふにこそあれ」という最初の一文である。重要語としては「そこ」「ものはかなき」がある。

- そこ (代名詞)
- 1 その場所。
 - 2 そのこと。
 - 3 どこそこ。
 - 4 あなた。きみ。おまえ。(親しい目下の者や友人に対して用いる)

- ものはかなし (夕活用形容詞)
- 1 どことなく頼りない。
 - 2 とりとめがない。

「そこ」には「たち」という接尾語がついており、「たち」は人や神を指す名詞に付いて複数を示す語だから、ここでは老女房や侍従といった、姫君に仕える者たちに向かって、阿闍梨の君が「あなたたち」と語りかけているととらえられる。侍従から、昨夜大將がやってきたことを聞かされた阿闍梨の君は、それこそが変化のものだとわかり、「いで(「いやもう)」と嘆息し、「そこたち(「あなたたち)のものはかなきに、悪しきものの所得てふるまふにこそあれ」と言う。「悪しきものの所得てふるまふ」とは、阿闍梨の君が「よからぬもの」と感じた邪悪な変化のものが「所得て」、つまり荒れ果てた邸という格好の場所を得て我が物顔にふるまうことを言う。そして、その原因として「そこたちのものはかなき」があげられているので、「ものはかなき」は前記1の「頼りない」の意でとるのがふさわしい。ここは、阿闍梨の君が、使用人たちに「あなたたち

が頼りないので、邪悪なものが我が物顔にふるまうのである」と、その情けなさを指摘しているのである。そしてその言葉に続けて、「悪しきもの」を「狐などいふけだものら」「所得てふるまふ」を「人の魂を侵しはかるわざする(「人の魂にとりついでいただきますことをする)」「悪しくしては取られもする(「下手をすると魂を取られたりもする)」などと言いかえることで、具体的にその正体や害を教えている。この阿闍梨の君の言葉の内容を正確に押さえているのが②で、これが正解となる。「すくよかに」を「毅然とした口調で」ととらえているのも、前記2の語義に合っており、正しい。

①は、「すくよかに」の意味が正しくないのに加え、「そこたちのものはかなき」を「姫君の邸は誰も訪れて来ない寂しい場所にある」としているのが誤り。前述のとおり、場所を指す「そこ」に接尾語「たち」が付くことはなく、ここでの「そこ」は場所を指してはいない。

③も、「すくよかに」の解釈で、すでに大きく外れているが、阿闍梨の君は「すでに物の怪は姫君に取り憑いているのだから、今さら騒いでみたところでどうにもならず」などとも言っていない。

④は、「氣をしつかりもつて何でもないように平然とふるまっていれば、邪悪なものに取り込まれることはない」というのが、「頼りないから邪悪なものにつけこまれる」という正解の主旨にも合った表現になっているという点では、間違っているとも言いがたいが、「この邸にいる自分たちが」という表現だと、発言者の阿闍梨の君までも含むことになってしまうので、その点で間違いであると言える。

⑤は、「そこたち」を「姫君の女房たち」と正しくとらえているし、「ものはかなき」の具体的な内容を「邸の手入れを怠り、荒れるのにまかせてきた」としているのだと考えれば、その点は誤りとは言えないが、「性悪な人間がつけ込む」というのが明らかに間違っている。阿闍梨の君はそのようなことは言っていないし、本文中で姫君のもとへ近寄ってきたのは変化のものだけで、「性悪な人間」は登場しない。

問5 和歌の説明問題

大学入試センター試験の古文において、和歌の設問は頻出で、ここ十年間の本試験において出題されなかったのは、'08年と'11年だけである。和歌の趣旨や内容、解釈、また修辞法などの表現技法が問われることもある。和歌を不得意とする人も多いだろうが、センター試験では出題されるものだと思つて学

習に取り組んでいこう。今回は、和歌の詠み手とその内容を問うている。

まずAの和歌を見ていこう。詠み手は、選択肢①・②ともに「大将」になっている。この和歌は「御使ひ」が持ってきた手紙に書かれていたもので、この場面で使いに手紙を託すのは、姫君のもとから帰っていった大将しか考えられないが、この「大将」というのは、この後の展開からすると、大将になりすました変化のものである。いずれにせよ、この歌が姫君に送られた際に、大将のものとして送られたことを考えると、詠み手を「大将」とするだけで、①・②を検討外とすることもできないので、ここは、内容について考えて正誤の判断をするしかない。

そこで、内容を検討しよう。和歌を解釈する時に、まずやるべきことは句切れの確認である。この歌は「雨もよに／来れど会はねば／濡れつつぞ／われは来にける／道のながてを」と句に分けられ、四句の「ける」が三句の係助詞「ぞ」を受けて連体形となり、係り結びが成立して、そこで文が終止しているので、四句切れである。このように句切れを確認したら、次は文法や単語にしたがって、普通の文章のように逐語訳を試みよう。初句の「雨もよに」とは一語の副詞で「雨が激しく降る時に」の意、「ながて」は名詞で「長い道のり」の意である。一首を訳してみると「雨が激しく降る時に来りけれど、会わないので、濡れながら私は来たことだ。長い道のりを」となる。

逐語訳ができたら、修辞技巧や歌の詠まれた状況を考えながら、一首の意味が通るように言葉を補って解釈するとよい。ここでは、「雨が激しく降る時に来る」のは大将で、「会わない」のは姫君である。だから大将は「濡れながら」と言うのだが、何に濡れているのかを考えると、それは降っている雨だけではない。問1の(4)で検討したが、この歌には直前に「昨夜は置きたる露もはらはん方なくて、からかりきや」という一文がある。ここでの「露」は、「草の葉などにおりる露」という意味と、先述したとおり、比喩的には「涙」の意味もある。状況的には、ここは雨が降っているのだから、現実には「露がおりている」というわけではなく、むしろこの「露」は、「姫君が会ってくれないがゆえに流す涙」という意味だと考えられる。そうなると、和歌の中で「濡れながら」と詠まれているのは、雨のためだけでなく、大将が流す悲しみの涙のためでもあると言うことができる。そして四句の「来にける」は、この場合は、上からのつながりでいくならば「家に

帰って来る」という意味ととらえられ、一首全体では「雨が激しく降る時に私は来るが、あなたが会ってくれないので、私は雨と悲しみの涙に濡れながら帰って来たことだ。長い道のりを」という内容の歌となる。選択肢①・②の内容についての記述を見ると、①は、「恋心を訴えている」のは確かでも、歌の内容は「あなたのことを思い切ることはできない」というものではなく、不適切である。②は、「どうしてもあなたは会ってくれないのか、その薄情さに憤りの涙が流れてしまうと責めている」が誤りである。「どうしてもあなたは会ってくれないのか」などという内容は詠まれていないし、「憤りの涙」というのも言い過ぎである。

次にBの和歌を検討しよう。詠み手は、③・④の選択肢すべて、「侍従が姫君になりかわって詠んだもの」となっている。本文には「侍従を聞こゆる（＝申し上げる）」とあるのだから、侍従が詠んだものには間違いないのだが、「姫君になりかわって」というところにひっかかりを感じた人もいるかもしれない。しかし、何らかの事情で歌を詠むことのできない主人のため、侍女などが代詠をするのは、古典の世界においてよくあることである。この場合も、返歌は本来ならば姫君がすべきところなのだが、姫君は気分がすぐれないので、代わって侍従が詠んだのであり、詠み手に関しては、選択肢はどれも正しいということになる。

歌の内容を見ていくと、「明けぐれの／うはの空より／降る雨を／帰る袖には／かこたざらなむ」と句に分けられ、句切れはない。「明けぐれ」は「夜明け方のまだ薄暗いころ」の意の名詞、「かこつ」は「かこつける・せいにする・嘆く・不平を言う」などの意のタ行四段活用動詞、「なむ」は直前の「ざら」が打消の助動詞「ず」の未然形であることから、他への願望を表し、「くしてほしい」と訳す終助詞だと決められる。複数の意味を持つ「かこつ」を保留にして逐語訳を試みると、「夜が明けきらない頃の空から降る雨を帰る袖には『かこたないでほしい』となる。

そこで、まず「帰る袖」という表現について考える。「袖」には、「袖の露（＝袖を濡らす涙）」「袖を濡らす（＝涙で袖を濡らす）」「袖を絞る（＝涙を流す）」など、「涙」と関連つけた表現がある。「帰る」の主体が大将であることや大将から送られた歌が「雨と涙に濡れた」という内容であつたことを考えると、この「帰る袖」とは「帰って行く大将の涙に濡れた袖」といった内容を持つととらえられよう。次に「かこつ」の意味を考える。仮に「かこつ」

を「嘆く」の意味でとらえると、「降る雨を涙に濡れた袖に嘆かないでほしい」となり、うまく意味が通じない。しかし、「かこつける・せいにする」の意味で考えると、「降る雨を涙に濡れた袖のせいにしないでほしい」となり、大将に対し、「雨で濡れたのに、涙のせいで濡れたなどと言わないでください」と切り返した歌として一首の意味も通じる。

その内容を押さえている正解は⑤である。③は願望の終助詞「なむ」の箇所はきちんと押さえられているが、和歌の内容の説明はまるで違ったものになっている。④は、和歌の内容の説明も違っており、「なむ」の訳出もできていない。

問6 文章の表現と内容に関する説明問題

大学入試センター試験の古文では、11年以來、表現と内容に関する問題が出題されている。それ以前にも時に表現や構成を問う問題があったが、この三年間は必ず「表現と内容」を問うており、この傾向はしばらく続くものと考えられる。一見したところでは何が正解なのかよくわからないと感じ、不得意とする人も多い設問形式だろうが、正解を選ぶというより、明らかな誤りを含む選択肢を除外していくという気持ちで取り組むのが確実であろう。では、一つ一つ確認していこう。

①は、「ほとほと鬼一口に食はるべかりけり」とあるように、……緊迫感に満ちた展開の中」の部分には誤りではないが、「御使ひは、糞虫のやうにて」「あが仏」「この君一人を高さ山とたのみて」などの、滑稽な比喩表現が差し挟まれることによつて」という部分が不適切である。「糞虫のやう」は、使いが雨具である蓑を着ている姿をたとえた表現。「高さ山」は阿闍梨の君をたとえた表現で、いずれも比喩表現である。これらを滑稽に感じるかどうかは意見の分かれるところであろうが、「あが仏」というのは、自分の信仰する仏や僧を敬つて言ったり、自分が大切に思っている人に、多くは哀願するときに呼びかけたりする表現であつて、ここは変化のものから救ってもらおうと、女房たちが阿闍梨の君に必死で呼びかけているものであるから、それを「滑稽」だとは言えない。

②は、「大将が姫君に会えずに帰った後のほぼ一日のことについて、……次第に荒れていく天候が克明に描写され」の部分について、その程度の天候の描写では「克明に」とまでは言い難い。何より、そういう描写によつて「化け物が自分をないがしろにした姫君とその周囲の人間への怒りを徐々にのらせていく様子が、伝わるようになっている」とい

う箇所が明らかに間違っている。変化のものは、大将になりすまして、姫君に会えなかつた悲しみを訴える和歌は送つてきたが、それ以外に、姫君を始めとする邸の人間に対してどのような感情を持つていたかということについて、本文には一切描かれていない。

③は、「前半では『御車の音』だけであつた聴覚的表現が、……などと多用されることによつて」の部分については、どこまでを「多用」とするのか、その範囲は決めにくいものであるが、少なくとも選択肢に引用されている部分は、「聴覚的」と言えそうなので、ここが誤りだとは言は難い。しかし、その表現によつて「阿闍梨の君と対峙した化け物が、激しい抵抗の末に、仏の力によつて一気に調伏される様子」が描き出されているというのは不適切である。変化のものは、「障子などもゆるがし開くる」という行動はとるが、それは「激しい抵抗」とは言えず、また阿闍梨の君が夜通し仁王経を読んだ結果は「ことなることもなくて（＝特に変わったこともなくて）」というもので、変化のものが「仏の力によつて一気に調伏され」たかどうかについて本文からは判断できない。

④が正解である。変化のものの正体をすばやく見抜いて対応する阿闍梨の君の頼もしい姿とは対照的に、女房たちの、最初は大將に会わなかつた姫君に腹を立て、泣きそうなほど大げさに騒いでいたのに、大將の正体を知った後は一転しておびえうろたえる様子が、皆で阿闍梨の君のもとに寄つてきて手をすり合わせて拝んだり、身を寄せ合つてふるえていたり、その具体的な行動の描写をまじえて、生き生きと描かれていると言える。

⑤は、「前半では『御粥などをもふれさせ給はず』……徐々に回復してゆく様子が描かれる」とあるが、中盤の「からうじて御髪もたげさせ給ふ」は、阿闍梨の君が来たと聞いたことに対する姫君の反応であつて、「回復」の過程を描いているとは言えない。また、姫君の「回復してゆく様子」が描かれていたとしても、それが「化け物も退散し、姫君がいずれ本物の大将と結ばれる明るい未来」と結びついていくことの根拠を、本文から読み取ることはできない。

第4問 漢文

【出典】

朱鶴齡『愚庵小集』全十五卷。朱鶴齡（一六〇六—一八三）は、明末清初の人で、呉江（現在の江蘇省呉江市）の出身。高節を買った人物として知られる。字を長孺と言ひ、愚庵、あるいは松陵散人と号した。明末の生員（官吏登用試験の有資格者）であったが、王朝が清に交替すると、官途への志を断つて郷里に帰り、著述に専念した。寝食を惜しむように執筆に没頭したため、周囲の者からは「愚」と称された。「愚庵」という号は、これに由来する。『愚庵小集』は朱鶴齡の詩文集である。本文は巻十四・雜著二に収められている「猫説」から採った。

【本文解説】

筆者は鼠の害に悩まされていた。蔵書の多くがカジられて、ぼろぼろにされる始末であった。そこで筆者は、隣の家に頼んで大きな猫をもらい受け、鼠退治に乗り出した。本文は、猫を迎え入れてからの経緯と、その結果生じた事態に対する筆者の心境を記したものである。

本文は、鼠退治の顛末を記した前半（冒頭から「益無忌む」まで）と、筆者が思いと心境を述べた後半（「余乃嘆曰」から末尾まで）との、二つの段落に分けられる。それぞれの段落の内容を順に確認してみよう。

第一段落は、猫を連れて来て以降の猫と鼠の行動を記述している。大きな爪と鋭い牙を備えた見るからに恐ろしい猫がやつて来ると、鼠たちは巢穴に身をひそめて隠れているかのごとくであった。筆者は、「これで鼠の害も収まるだろう」と喜んだ。ところが、ひと月ほどするとまた鼠が暴れ出し、がりがりと物をかじる音に夜通し悩まされるようになった。不審に思った筆者が様子を窺ってみると、なんと予想外の事態が生じていた。猫の好物が塩漬の魚だと知った鼠は、その好物を用意しておいて猫に与えていたのである。労せずして好物にありつけるようになった猫が鼠のなすがままを許したので、鼠は何ら恐れることなく再び暴れ出したというわけである。

第二段落では、予想外の事態に対して筆者が自らの心境を述べている。「猫を飼うのは、鼠を捕まえてくれるからだ。それなのに、うちの猫ときたら、鼠を導き入れるばかりか、鼠と仲良くなってしまうている。これでは、うちの猫は鼠の首領と言うほかはない。こんな猫は追い出してしまった方がましだ」と、筆者は嘆いているのである。

本文には「猫説」という題目が付せられているが、

「説」とは文体の名称で、物事について意見を提示した議論文のことである。犬猿の仲であるはずの猫と鼠が親しくなってしまったという話であるから、「猫の寓話」と解釈してもよさそうである。勿論、本文の重点は、「余乃嘆曰」以下にある。具体的な対象はわからないが、官吏としての志を断念した筆者が、当時の官界を風刺するために書いた文章なのであろう。

【書き下し文】

余が家鼠の患ひ多く、蔵書多く齧蝕せらる。隣家に猫有り、乞ひて之を得たり。形魁然として大なる爪あり、牙甚だ鋭し。始め至るや、群鼠穴中に屏息すれば、余私に鼠の患ひの此より強まんことを喜べり。月余に遄るに、患ひ復た大いに作こり、終夜作嘔として声有り。余怪しみて之を向へば、則ち猫鼠と甚だ比して寝処を同にし、偕相するがごとく然り。其の故を詠ふに、猫性鮑魚の腥を貪嗜し、中厨の度する所は、見れば必ず窃み取りて之を食ふ。鼠其の然るを覚るや、凡そ猫の嗜む所は、鼠必ず預め儲けて以て之を路に遺す。猫啗ひて之を徳とし、遂に一に為す所に任ず。鼠始め形の大なるを以てして猫を畏るも、既に嗜む所を以て猫に嘗めしむれば、終に則ち猫に猫れ、猫を参ひ、猫有るを利とし、其の出でて患ひを為すや、益忌むこと無し。余乃ち嘆じて曰はく、「甚だしきかな、食るの毒や。猫をして窃む所無からしめば、鼠其れ敢へて之に嘗めしめんや。猫既に鼠に先んじて窃むを為さば、其れ能く鼠の群れて窃むを禁ぜんや。猫を善ふは本より鼠を捕ふるを以てなり。而るに今反つて以て鼠を善き、且つ之に昵むこと一たり。是れ鼠の魁なり。曷そ鼠の魁を去りて群鼠の患ひ猶ほ少しく強ひ或るに若かんや」と。

【全文解釈】

わたしの家は鼠の害がひどく、蔵書はその多くが（鼠に）かじられてぼろぼろにされた。隣の家で猫を飼っていたので、頼んでその猫を譲ってもらった。（猫は）体がとても大きく立派な爪を備え、牙もたいそう鋭かった。（その猫が我が家に）やつて来たばかりのころは、鼠どもは（巢）穴の中で息をひそめていたので、これからは鼠の害が収まるだろうと私は内心喜んでいた。（ところが）ひと月余りすると、（鼠の）害がまた大いに起こり、（鼠は）夜通しがりがりと物をかじる音をたてていた。私が不審に思って様子を窺ってみると、猫は鼠とすっかり仲良くなつてねぐらを共にし、一方が唱えると、他方がそれに合わせて唱えるかのようなのであった。そのわけを探ってみると、猫は生来塩漬にした魚をむさぼり食うほど好んでおり、台所にしまつてある塩漬の魚は、目にすれば必ず盗

み取って食べていた。鼠はそうだとわかると、猫の好物はすべて、鼠が必ず前もってそれを用意しておいて(猫の通り)道に置いておくようにしたのである。猫は(鼠が置いておいてくれた好物を)むさぼり食って(鼠の行動を)ありがたく思い、その結果(猫は)すべて(鼠の)為すがままにさせるようになった。鼠は(猫がやって来た)当初は体が大きいので猫を恐れていたが、好物を猫に食べさせ(続け)、とうとう猫に狎れ、猫を養ってやり、猫の存在を自分たちの利益とみなすようになり、鼠は(巢穴から)出て来て害をなす時には、ますますはばかることがなくなっていた。わたしはそこでため息をついて言った、「ひどいものよ、貪欲という害毒は。猫に盗みたいと思う食べ物がなければ、鼠も猫に(それを)食べさせようとするはずがない。(しかし)猫が鼠よりも先に(好物を)盗み取って食べるとすれば(=猫に盗みたいと思う食べ物があれば)、鼠が群れをなして盗むのを防ぎ止めることなどでできはしない。猫を飼うのは本来鼠を捕まえてくれるからである。それなのに今は逆に猫が鼠を先導し、そのうえ鼠にすっかり慣れ親しんでさえている。これでは(猫がかえって)鼠の首領となってしまうている。(こんなことなら)鼠の首領(である猫)を取り除いて鼠どもの害が少しでも収まる方がましだ」と。

【重要語・基本句形】

(1) 重要語	
思 <small>おも</small> ひ	悩み・心配事
私 <small>わたし</small>	こつそりと・内心
自 <small>みづか</small> ら	——から(起点を表す)
復 <small>また</small> す	再び・もう一度
則 <small>すなは</small> ち	…… ———すれば、…… / ———した
	ので、…… (仮定条件・確定条件を表す)
与 <small>あ</small> ら	Aと——する
若 <small>ごと</small> く	——するかのようだ
然 <small>しか</small> ら	そうである・そのようである
性 <small>せい</small>	本性・本質
	也、…… ———すると、…… / ———する
	際、……
凡 <small>た</small> ら	すべて・おしなべて
所 <small>ところ</small> で	Vするもの・こと
以 <small>も</small> つ	…… ———して、(それで)……する
遂 <small>つい</small> に	その結果・こうして
一 <small>いっ</small> ぱ	すべて・みな・ひとえに
以 <small>も</small> つ	① Aなので——する(理由・原因

	を示す)
②	Aによつて——する(手段・方法を示す)
③	Aを——する(目的語を示す)
*	「——以 <small>も</small> つA」は「以 <small>も</small> つA——」の倒置形
既 <small>すで</small> に	もうすでに・——する以上
嘗 <small>た</small> ま	味わう・経験する
終 <small>つい</small> に	とうとう・最終的に
益 <small>ますます</small>	ますます
乃 <small>すな</small> は	そこで / やつと / かえつて / なんと
其 <small>その</small>	いつたい(強意の語)
本 <small>もと</small>	もともと・本来
而 <small>しか</small> し	しかし・だが
反 <small>さか</small> り	逆に・反対に
猶 <small>や</small> はり	やはり
少 <small>すこ</small> し	すこし・やや

(2) 基本句形

被 <small>あ</small> ら	Vされる(受身形)
哉 <small>いか</small> ん	□なこともよAは(詠嘆形)
使 <small>し</small> え	もしAが——したら(仮定形)
*使 <small>し</small> え	Aに——させる(使役形)
敢 <small>あ</small> ら	耶 進んで——しようか(いや進
	んでは——しない・いや——しよ
	うとしない)(反語形)
能 <small>あ</small> ら	耶 ——することができようか(いや
	——できない)(反語形)
若 <small>ごと</small> く	耶 どうして——するのに及ぼう
	か(いや——するのに及ば
	ない・いや——する方がま
	しである)(反語形・比較形)

* (セ)は活用語の未然形、(シ)は活用語の連用形、(ス)は活用語の終止形、(スル)は活用語の連体形、(スレ)は活用語の已然形、(ナル)は形容詞・形容動詞の連体形を、それぞれ表す。

【設問解説】

問1 語の意味の問題

(1)「終夜」の意味は、現代語でもしばしば用いられる「終日」という語を手がかりにすると考えやすい。「終日」は④に挙げられている「一日中」という意味であり、「日を終るまで」と訓読できる。したがって、同じ構造の「終夜」は「夜を終るまで」と訓読でき、「一晩中」という意味だとわかる。これと同じ意味であるのは、④「夜通し」だけである。よつて正解は④である。

(2)「魁」には、「大きな柄杓」・「かしら」・「さきがけ」・「第一番目」・「大きい」・「根本」など様々な意

味があるが、④「仲間」や⑤「怪物」という意味はない。したがって、解答は①「先頭」・②「元祖」・③「首領」に絞られるが、いずれも「かしら」や「さきがけ・第一番目」という方向の共通の意味の要素を持っているので、文脈を踏まえて考える。

ところで、傍線部を含む一文「是鼠魁也」を、「魁」をそのままにして直訳すると、「これは鼠の魁である」となるが、「是」と前の内容を受けていることに注目したい。そこで、直前の二文を確認してみると、「蓄猫本以捕鼠。而今反以導鼠。且昵之為一」（猫を飼うのは本来鼠を捕まえてくれるからである。それなのに今は逆に猫が鼠を先導し、そのうえ鼠にすっかり慣れ親しんでさえている）とある。つまり、本来鼠を退治するべきはずの猫が、逆に鼠の仲間になってしまっていると述べているのである。この内容を踏まえれば、「鼠魁」＝「鼠のかしら」つまり「鼠の親玉」ということであり、ここの「魁」は③「首領」と解するのが適切である。よって、正解は③である。

問2 解釈の問題

留意したい語は、「私」と「自此」である。「私」は「ひそかに」と読んで「こつそりと・内心」という意味であり、「自此」は「これより」と読んで「これから」という意味である（①「重要語」の該当項目を参照）。

以上を踏まえて傍線部の意味を考える。まず、冒頭の「余私喜」は「わたしは内心喜んだ」と直訳できる。そして、「喜」以下の「鼠患、自此弭」が「わたしが内心喜んだ」対象である。「ゴトラ」という送り仮名および「一・二点」に注目して、文の構造をしっかりと捉えよう。「弭」は「やむ」という読みを手がかりにすれば、「止む」と同じ意味だと判断できる。また、末尾の「矣」は断定の意味を表す置き字であるから、文意の方向に影響を与えることはない。したがって、「鼠患、自此弭」は「鼠の悩みがこれから止むであろうこと」と直訳でき、傍線部全体の意味は「鼠の悩みがこれから止むであろうことをわたしは内心喜んだ」となる。

では、「鼠患」（鼠の悩み）とはどういう意味か。そこで、本文冒頭の一文に注目する。「余家多鼠患、蔵書多被齧蝕」（わたしの家は鼠の害がひどく、蔵書はその多くが鼠にかじられてぼろぼろにされた）とあるから、「鼠患」とは「鼠による害」ということである。

次に、「自此」（これから）の具体的な内容を考

える。傍線部の直前には「始至、群鼠屏息穴中」（その猫が我が家に来て来たばかりのころは、鼠どもは巢穴の中で息をひそめていたので）とあるから、この記述を受けている傍線部の「自此」の具体的な内容は、「隣の家からもらい受けた猫がやって来てから」である。本文冒頭より二文目の「隣家有猫、乞得之」（隣の家で猫を飼っていたので、頼んでその猫を譲ってもらった）という記述もしつかり確認しておこう。

では、選択肢を検討してみよう。まず、③の「鼠がいなくなり、これで」と④の「鼠がいなくなつてから」は、「自此」の解釈として明らかな誤りである。さらに、③の「猫の仕事がなくなつた」、④の「猫の鳴き声に悩まされなくなつても」、「喜」の内容として不適切であり、「私」についても、③「猫のために」、④「大いに」と誤った解釈をしている。②は「鼠のもたらす疫病の被害を免れて」が、やはり「喜」の内容として誤りであるうえ、「心底」も「私」の解釈として不適切である。⑤も「鼠の巢穴を見つけられなかったこと」が「喜」の内容として誤りであるうえ、「私」を「私は鼠のために」と解釈している点も不適切である。よって、正解は①「猫をもらつたことにより、これからは鼠の害が収まるだろうと私は内心喜んでた」である。

問3 内容説明の問題

傍線部を含む一文は「余怪而伺之」（私が不審に思つて様子を窺つてみると）となっているから、筆者が不審に思つたことは、傍線部よりも前に記述されているはずである。そこで、傍線部の直前の一文「迨月余、患復大作、終夜咷咷有声」（ひと月余りすると、鼠の害がまた大いに起こり、鼠は夜通しがりがりと物をかじる音をたてていた）に注目する。鼠の害を収めようと、筆者は隣の家から大きな猫をもらい受けた。猫がやって来ると、案の定、鼠は巢穴にこもつて鳴りを潜めていた。そして、問2の解説で確認したように、筆者はこれで鼠の害が止むものと内心喜んでたわけである。ところが、ひと月ほどすると、鼠がまた夜通しがりがりと物をかじる音をたてるようになったので、筆者はこのことを不審に思つたのである。

以上を踏まえて選択肢を検討すると、②「鼠と猫が仲良くなりねぐらまで共にしていること」、③「鼠が悪さをしなくなり静かになったこと」、④「塩漬の魚が台所から見見る減つていったこと」、⑤「猫が鼠をまったく捕えようとしないこと」のいずれも、筆者が不審に思つたことの説明として不適

切である。したがって、正解は①「猫を連れてきて一か月ほどすると、再び鼠が物をかじる音がするようになったこと」である。

問4 内容説明の問題

傍線部を直訳すると、「鼠はそれがそうであるとわかる」となる。ここの「覚」は、「さとる」と読まれているので、「気づく・わかる」という意味である。選択肢の末尾がいずれも「鼠が気づいたということ」となっていることに注意しよう。また、選択肢の冒頭も、すべて「この猫は、」で始まっているので、「其」の指示内容も「この猫（＝筆者が隣の家からもらいた猫）」だとわかる。したがって、この問題で問われているのは、「然（そうである）」の指示する内容であると判断できる。

さて、「然」の内容は、傍線部よりも前に記述されているはずである。そこで、傍線部の直前の一文に注目したい。「訓、其故、猫性貪嗜、飽魚腥、中厨、所、度、見、必、窃、取、食、之」（そのわけ「猫がねぐらを共にするほど鼠と仲良くなったわけ」を探てみると、猫は生来塩漬けにした魚をむさぼり食うほど好んでおり、台所にしまつてある塩漬けの魚は、目にすれば必ず盗み取つて食べていた」とある。これを受けて傍線部の記述があるのだから、「然」の内容は「猫は盗み食いするほど塩漬けの魚を好物にしている」ということである。

この内容を踏まえて選択肢を検討すると、①「大きくて恐ろしいが、鼠の小さな巢穴には入れない」、③「塩漬けの魚を鼠に取られても取り返そうとしない」、④「一見塩漬けの魚が好物のようだが、本当は好物ではない」、⑤「仲間になったように見えても、やはり恐ろしい敵である」は、いずれも「然」の内容を取り違えている。「然」の内容を正しく捉えているのは②「盗み食いするほど塩漬けの魚を好んでいる」だけである。したがって、正解は②である。

問5 返り点のつけ方と書き下し文の問題

返り点のつけ方と書き下し文との組合せの問題は、選択肢に頼り切つては正誤の判断は難しい。文脈を踏まえて、問われている文の構造を正しく捉え、文意をよく考えたうえで選択肢を検討することが大切である。また、いわゆる訓読の問題は、重要語や基本句形が含まれていることが多いので、その点にも十分留意したい。

傍線部は読点で区切られた長めの文なので、前半と後半に分けて考えてみよう。まず、前半の「凡猫之所嗜」では、重要語「所」に注目する。「所」は

直後に動詞を伴っている場合は、「所^トV^ス」と読み、「Vするもの・こと」という意味である（①**重要語**）の該当項目参照。傍線部B「遂^ニ任^ニ所^ト為^ス」の「所^ト為^ス」も手がかりとなろう。傍線部の「嗜」は、いずれの選択肢も「このむ」と動詞として読んでいるので、「所嗜」の箇所は「所^ト嗜^ム」と読めばよい。さらに、「所^ト嗜^ム」の直前に「猫之」と「嗜^ム」の動作主体が示されていることにも注意する。したがって、前半の「凡猫之所嗜」は、とりあえず「凡^ニ猫^ノ所^ト嗜^ム」（凡そ猫の嗜む所）と訓読でき、「猫の好物はすべて」という意味に解釈できる。「凡」については、いずれの選択肢も「およそ」と読んでいるので、正誤判断の必要はない（①**重要語**）の該当項目を参照。すると、②「凡そ猫之きて嗜む所ならば」、③「凡そ猫嗜む所に之かは」、④「凡そ猫嗜む所に之くも」という読み方は、「所^ト嗜^ム」は正しく読んでいるものの、いずれも「之」を「猫」が「嗜^ム」の動作主体であることを示す主格の「之」ではなく、動詞「之」（行く）と解釈しているので誤りだとわかる。

これで正解は①と⑤に絞られるので、次にそれぞれの後半の読み方を確認してみよう。ポイントは「以」の用法である。①も⑤も、「預^メ儲^ヘ」（あらかじめ蓄えておく・前もって用意しておく）と「遺^ニ之^ヲ于路^ニ」（これを道に置いておく）の読み方・解釈は同じであるが、「以」の用法については、①が「^ニ以^テ A」（①**重要語**）の該当項目を参照）として捉えているのに対し、⑤は「^シ以^テ ……」（と捉えている点が異なる。「之」の指す内容は直前の「猫之所嗜」（猫の好物）と解するのが自然であるから、①の後半の「鼠必ず預^メ儲^ヘふるに之を路に遺^ニすを以てす」という書き下し文を解釈すると、「鼠は必ず前もって猫の好物を道に置いておくことによつて用意しておく」となり、何の用意をしておくことなのか、判然としない。一方、⑤の後半の「鼠必ず預^メ儲^ヘて以て之を路に遺^ニす」という書き下し文を解釈すると、「鼠は必ず前もって猫の好物を用意しておいて（猫の通り）道に置いておくようした」となり、前半の「凡^ニ猫^ノ所^ト嗜^ム」（猫の好物はすべて）とも、傍線部直後の「猫嗜^ム而徳^ト之」（猫は鼠が置いておくれた好物をむさぼり食つて鼠の行動をありがたく思い）とも矛盾なくつながり、文脈が成立する。したがって、正解は⑤である。

返り点のつけ方や書き下し文の問題は、重要語や基本句形に留意したうえで文の構造を正しく捉えることが勿論大切であるが、語句の用法について複数

の解釈があり得る場合には、文脈にも配慮して考えるようにしよう。

問6 状況説明の問題

状況説明の問題であるから、まず傍線部の意味を正しく把握したうえで考えなければならない。その際、「二」の意味に注意する。「二」は多様な意味を持っているが、傍線部では「二」と読んでいることに注意しよう。つまり、ここの「二」は「すべて・みな・ひとえに」という意味で、直後の「任」を修飾しているのである。したがって、傍線部は「その結果すべて為すがままにさせた」と直訳できる。「所為」の「所」の用法は、すでに問5の解説で説明したとおりである。

では、「任」と「為」の動作主体は、それぞれ何か。傍線部直前に「猫啗^ニ而徳^ニ之^ニ」(猫は鼠が置いておいてくれた好物をむさぼり食って鼠の行動をありがたく思い)とあり、読点で区切られて傍線部につながっており、改めて文の主体は明示されていないから、傍線部の主体、つまり「任」の主体は「猫」と考えるのが適切であり、いずれの選択肢も「任」の主体は「猫」と解釈している。すると、「為」の主体は「猫」自身ではありえず、傍線部までの内容を考慮すれば(詳しくは【全文解釈】を参照)、「鼠」以外には想定できない。よって、「任」の主体の「猫」および「為」の主体の「鼠」を補って傍線部を訳出すると、「その結果猫はすべて鼠の為すがままにさせるようになった」となる。

この解釈と文脈を踏まえて選択肢を確認してみよう。②「どんなことであろうとも鼠に従うことにした」、③「いたって気ままに行動するようになった」、④「他の食べ物にはまったく目もくれなくなった」は、いずれも「任所為」の説明として不適切である。⑤は、「鼠の食べ残しでも腹一杯食べられることに満足し」が「猫啗^ニ而徳^ニ之^ニ」の説明として不適切であるうえ、「主人の命令を少しも聞かなくなった」も傍線部自体の解釈として誤りである。したがって、正解は①「猫は、鼠が自分の好物を用意してくれるのをありがたく思ったので、鼠のすることをすべて許した」である。

問7 書き下し文と解釈の問題

まず、前半の「使^ニ猫^ニ無^ニ所^ニ窃^ニ」から考えてみよう。注意すべき語は「使」である。使役形「使^ニA^ニ」(Aに―させる)と仮定形「使^ニA^ニ―」(もしAが―したら)の可能性が考えられるが(② 基本句形)の該当項目を参照、いずれの句形であるにしろ、「A」の要素に当たる傍線部

の「猫」は、「猫^ヲ」と「をして」を送って読むことに変わりはない。よって、①・③の「猫に」⑤の「猫の」という読み方は誤りである。

次に、残った②と④の後半「鼠其敢嘗^ニ之^ニ耶」を検討しよう。どちらも「鼠其れ敢へて」という読み方、「嘗」を動詞「嘗^ム」(味わう・経験する)とする解釈・読み方、そして「―耶」を反語形「―^モ耶」と解釈している(② 基本句形)の該当項目を参照)点は同じである。そこで、④が「嘗^ニ之^ニ」を「之を嘗む」と書き下し、「鼠もそれを味わう」と解釈している点に注目する。④の「解釈」は「猫に盗みたいと思う食べ物がないということは、鼠もそれを味わうことができないということだ」となっているが、これでは文脈が成り立たないことに気づいてほしい。傍線部は直後の一文と対になっている。つまり、「使^ニ猫^ニ無^ニ所^ニ窃^ニ」は「猫既^ニ先^ニ鼠^ニ為^ニ窃^ニ」(猫が鼠よりも先に好物を盗み取って食べるとすれば)と、「鼠其敢嘗^ニ之^ニ耶」は「其能^ニ禁^ニ鼠^ニ之^ニ群^ニ窃^ニ耶」(鼠が群れをなして猫の好物を盗むのを防ぎ止めることなどできはしない)と対になっており(【全文解釈】を参照)、「条件」(猫に盗みたいと思う食べ物がなければ/猫に盗みたいと思う食べ物があれば)↓「結論」(鼠も猫にそれを食べさせようとするはずがない/鼠が大群で猫の好物を盗むのを防ぎ止めることなどできはしない)という関係を成しているのである。したがって、④の「猫をして窃む所無からしむるは」(猫に盗みたいと思う食べ物がないということは)という前半を主体化した読み方・解釈も、「鼠其れ敢へて之を嘗めんや」(鼠もそれを味わうことができないということだ)という後半の読み方・解釈も、文脈を考慮していない誤ったものである。②のように、「猫をして窃む所無からしめば」(猫に盗みたいと思う食べ物がなければ)と前半を条件として解釈して書き下し、その結論として後半を「鼠其れ敢へて之に嘗めしめんや」(鼠も猫にそれを食べさせようとするはずがない)と解釈して書き下せば、文脈が成立する。「嘗」を「なめしむ」と使役の意味を含めて解釈しなければ、文意が成り立たないことに注意したい。したがって、②が正解である。

問8 心境説明の問題

【本文解説】でも説明したように、本文は、鼠退治の顛末を記した前半と、筆者がその結末に対して自らの思いと心境を述べた後半との二つの段落に分けられる。したがって、ここで問われている「この文章全体から読み取れる筆者の心境」については、

「余乃嘆曰」以下の後半に記述されているはずである。筆者の会話文冒頭の「甚哉、貪之毒也」（ひどいものよ、貪欲という害毒は）は、言うまでもなく、鼠退治のために大きな猫をもらい受けたはずなのに、その猫が鼠の策略によって鼠と仲良くなり、かえって鼠の害を誘発する存在になったことを嘆いた独白である。「蓄猫本以捕鼠。而今反以導鼠、且昵之為。」（猫を飼うのは本来鼠を捕まえてくれるからである。それなのに今は逆に猫が鼠を先導し、そのうえ鼠にすっかり慣れ親しんでさえる）という言葉からも、筆者の嘆きの心境が窺える。そして、筆者の心境を最も端的に述べているのは、発言末尾の「最若去鼠魁而群鼠之思猶或少弭耶」（こんなことなら鼠の首領（である猫）を取り除いて鼠どもの害が少しでも収まる方がよかったです）である。つまり、「猫を連れてきたことがかえって鼠の害をひどくしてしまったのだから、今となつては、鼠の害をひどくした原因である猫を追い払って、少しでも鼠の害を食い止めた方がよほどよい」と嘆きの心境を吐露しているのである（**本文解説**）および**【全文解説】**を参照）。

以上を踏まえて、選択肢を検討してみよう。

①「鼠を捕えるのを本性とする猫もそうでない猫もいるが、譲り受けた猫は鼠を退治しないどころか鼠にすっかり親しんで餌を分け合つてさえるので、仕方ない猫だと呆れかえっている」は、「鼠を捕えるのを本性とする猫もそうでない猫もいる」と「餌を分け合つてさえる」が本文に書かれていない内容であるうえ、「呆れかえっている」も、「嘆き」という心境から外れている。

②「鼠が蔵書をかじるのを防ごうと猫を飼い始めたが、猫は塩漬の魚を盗み食いするばかりで大きな爪も鋭い牙も一向に使おうとしないので、ただの

役立たずだと腹立たしく思っている」は、猫が筆者の家に来て来た当初の事実の説明としては不適切な点はないが、筆者は単に「腹立たしく思っている」のではなく、「猫を取り除いた方がまし」、つまり「猫などいない方がよい」と言っているのであり、筆者の心境の説明として不十分である。

③「鼠の害を除こうと思って頼み込んで猫を譲ってもらったが、貯蔵していた塩漬の魚をねらつて猫と鼠が結託してしまったので、今後どうやって鼠を駆除するべきか戸惑っている」は、「貯蔵していた塩漬の魚をねらつて猫と鼠が結託してしまった」という説明が、「鼠が猫を手なづけようと、好物の塩漬の魚を猫に食べさせた」という本文の内容とは完全には合致しないし、「今後どうやって鼠を駆除するべきか戸惑っている」も、「嘆き」の説明として適切でない。

⑤「鼠の害に悩まされていたために猫をもらってきたが、偶然にも猫と鼠が仲良く暮らすようになった様子を見て微笑ましい気持ちになつたので、鼠の害はこのままでもよかろうと諦めている」は、「微笑ましい気持ちになつた」がまったく誤つた説明である。筆者は鼠退治がうまくゆかず、猫と鼠が仲良くなつたことに困っているのである。さらに、「鼠の害はこのままでもよかろうと諦めている」が、本文末尾に述べられている筆者の言葉と合致しない。

④「鼠を退治してくれるからこそ猫を飼うものだが、もらい受けた猫が強欲のあまり鼠の計略にはまつて逆に被害が大きくなり、こんなことなら猫などもらわなければよかつたと嘆いている」は、鼠退治の顛末の説明に矛盾はなく、「猫などいない方がよい」という筆者の心境を「嘆き」として正しく捉えている。したがって、正解は④である。